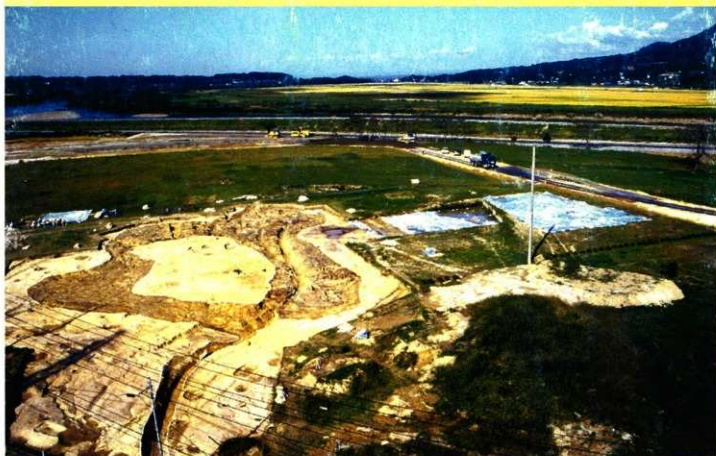


岩手県文化財調査報告書第123集

平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

— 第64次発掘調査概報 —



平成19年3月
岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告書第123集
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

— 第64次発掘調査概報 —

平成19年3月

岩手県教育委員会

序 言

平泉町に所在する柳之御所遺跡は、平安時代末期の約100年間にわたって北方の王者として繁栄を誇った奥州藤原氏時代の遺跡であり、特別史跡中尊寺境内、特別史跡毛越寺境内、特別史跡無量光院跡と並び、当時の東北地方における政治・経済・文化の中心であった平泉の核をなしていた遺跡の一つであります。

本遺跡は、昭和63年から（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会が実施した一級河川北上川上流改修一閑遊水地事業及び国道4号改修平泉バイパス建設事業に伴う緊急発掘調査により、大規模な掘立柱建物跡・園池跡・溝跡などが確認され、また、おびただしい量のかわらけ・墨画資料など、質・量ともに内容豊かな遺物が出土しました。これら大量の遺構・遺物から、本遺跡が「吾妻鏡」にみられる「平泉館」であるとの考えが多くの歴史家から指摘されるようになりました。

このような経過のなかで、遺跡に対する建設省（現国土交通省）のひとかたならぬ御理解により、平成5年には遺跡の永久保存が決定し、平成9年3月には「柳之御所遺跡」として国の史跡に指定されました。さらに、本年度、本遺跡を含む平泉の文化遺産を「平泉—浄土思想を基調とする文化的景観」として国連教育科学文化機関の世界文化遺産に正式に推薦することが決定されるなど、現在は平成20年の世界遺産本登録を目指した取り組みも進めております。

県では、本遺跡が国民共有の貴重な財産であるとの認識から、将来的には史跡公園として整備し、この遺跡を後世に伝えるとともに広く活用していきたいと考え、平成10年度から本格的な発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成17年度第64次発掘調査成果をまとめたものですが、文化財保護と平泉文化研究発展の一助になれば幸いと存じます。

最後に、発掘調査の実施と報告書作成に当たり、ご指導・ご協力を賜りました平泉遺跡群調査整備指導委員会の先生方、文化庁記念物課、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所をはじめ関係各位に深く感謝申し上げます。

平成19年3月

岩手県教育委員会
教育長 照 井 崇

例 言

1. 本書は、岩手県教育委員会が平成17年度に実施した柳之御所遺跡整備調査事業に係る、史跡柳之御所遺跡の発掘調査の概要報告である。調査期間は平成17年4月15日から9月30日までである。
2. 本事業は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が主体となり、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。

〈岩手県教育委員会事務局〉

〈(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター〉

生涯学習文化課総括課長 渡邊 淳

所 長 相原 康二

文化財・世界遺産担当課長 中村 英俊

調査第二課長 中川 重紀

主任主査(埋蔵文化財担当) 高橋 一浩

文化財調査員 杉沢昭太郎(担当)

主任主査(柳之御所担当) 佐藤 嘉広

文化財調査員 吉田 充

文化財調査員 大関 真人

3. 遺構の呼称は、昭和63年度に(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した調査時の方法に準拠し、下記の略称を使用した。遺構名の記載については遺構略号の前に調査次数を付してある。なお、複数年次にわたる調査で明らかに同一と認定される遺構については当初の調査時の遺構名を継続して使用した。

SA: 塀・柱列 SB: 掘立柱建物 SC: 道路状遺構 SD: 溝・堀 SE: 井戸・井戸状遺構

SG: 園池 SK: 土坑・柱穴の一部 SX: その他 SI: 聚穴住居 P: 柱穴

例: 64SD1 第64次調査の第1号溝・堀跡

4. 図版、写真図版、遺物観察表中の遺物番号は共通である。遺物の実測図については一部を除いて1/3を基本にしておりスケールを図中に表示した。遺構遺物写真については縮尺不定である。
5. 調査成果の一部については、平泉遺跡群調査整備指導委員会等で公表してきたが、本書の内容が優先するものである。
6. 遺構の埋土観察、遺物の色調観察、「新版標準土色帖」を参考にした。
7. 自然科学分析については株式会社古環境研究所及び岩手県立博物館への分析委託により実施したものである。
8. 後述する平泉遺跡群調査整備指導委員会の先生方をはじめとして、下記の機関の御協力を得た。
(順不同: 敬称略)
岩手県立博物館 平泉町教育委員会 平泉町文化財センター 柳之御所資料館
奈良国立文化財研究所
9. 野外調査・室内整理等に從事していただいた方々の御協力に深く感謝いたします。
10. 本事業に係る調査で得られた諸記録及び出土遺物は、岩手県教育委員会が保管している。

目次

序
例言

本文目次

I はじめに	4	(2) その他の遺物観察表	43
II 自然環境	8	4 まとめ	49
III 検出された遺構と遺物		IV 付編	
1 園池跡と付属施設	12	1 柳之御所遺跡跡園池(23SG1)の水源推定	56
第59次調査	12	2 柳之御所遺跡における植物珪体分析	60
第64次調査	25	3 柳之御所遺跡12世紀出土木製品の樹種同定	65
2 その他に検出された遺構	34	4 柳之御所遺跡出土壁材調査	66
3 出土遺物	41		
(1) かわらけ観察表	42		

図版目次

第1図 平泉町位置図	8	第17図 石組2	32
第2図 遺跡位置図及び周辺の地形・地質概況図	9	第18図 石組3	33
第3図 柳之御所周辺の遺跡分布図	11	第19図 64SK1・2	34
第4図 23SG1平面図(23次調査検出状況)	16	第20図 57T1	35
第5図 トレンチ位置図	17	第21図 57T2B・57T4~T6	36
第6図 59T1a~T1b平面図	18	第22図 23SG1縦横断面図	37
第7図 59T1a~T1c断面図	19	第23図 23SG1横断面図	38
第8図 59T1e~T1f位置図	20	第24図 23SG1縦断面図	39・40
第9図 59T1d~T1f断面図	21	第25図 かわらけ(1)	44
第10図 59T2平・断面図	22	第26図 かわらけ(2)	45
第11図 59T3平・断面図	23	第27図 かわらけ(3)	46
第12図 59T4平・断面図	24	第28図 国産陶器・中国産陶磁器・瓦	47
第13図 64T1・64SX1	28	第29図 木製品(修羅)	48
第14図 64T2~T4	29	第30図 23SG1(I期)平面図	53
第15図 園池南西部の地形	30	第31図 23SG1(II期)平面図	54
第16図 石組1	31	第32図 23SG1(III期)平面図	55

写真図版目次

写真図版1 23SG1全景(1)	74	写真図版13 かわらけ(3)	86
写真図版2 23SG1全景(2)	75	写真図版14 かわらけ(4)	87
写真図版3 23SG1全景(3)・(4)	76	写真図版15 かわらけ(5)	88
写真図版4 出土土壁サンプル	77	写真図版16 かわらけ(6)	89
写真図版5 64SX1(1)	78	写真図版17 かわらけ(7)	90
写真図版6 64SX1(2)	79	写真図版18 かわらけ(8)	91
写真図版7 64SX1(3)・64T2	80	写真図版19 かわらけ(9)ほか	92
写真図版8 64T2・石組1・2・湧水地点	81	写真図版20 国産陶器・瓦	93
写真図版9 石組3・石敷検出・修羅出土状況	82	写真図版21 木製品(修羅)	94
写真図版10 修羅出土状況・64SK1・2	83	写真図版22 出土土壁サンプル(1)	95
写真図版11 かわらけ(1)	84	写真図版23 出土土壁サンプル(2)	96
写真図版12 かわらけ(2)	85		

I はじめに

1 調査経過

県教育委員会では、柳之御所遺跡が平成9年に国の史跡に指定されたことから、当遺跡を史跡公園として整備し保存活用を図るため、文化庁・柳之御所遺跡調査研究指導委員会（現平泉遺跡群調査整備指導委員会）の指導助言を得て、平成10年度から主に未調査区域を対象とした内容確認の発掘調査を計画的・継続的に行っており、三ヶ年を1サイクルとし第1期整備対象区域である堀内部地区を中心として調査を実施している。

平成10年度実施した第49次調査は、既往の調査で検出されていた園池・中心建物群を囲む堀跡の遺跡に主眼を置いて実施した。北上川に面する東辺の堀跡の遺跡を行った結果、緊急調査時点で検出されていた部分から7mほど北に向かい延長することが確認された。しかし、さらなる延長については検出されなかった。

平成11年度実施した第50次調査では、既往の調査で確認された園池や大型の建物など、堀で囲まれた中核域の周辺地域での12世紀代の遺構の広がりや密度を確認することを目的として発掘調査を行った。その結果、12世紀代の遺構が現況の河岸線まで分布し柳之御所遺跡の一部が北上川の侵食で失われていることが確認された。また、堀や井戸状遺構の検出、複雑に重複する掘立柱建物などが多数検出され、複数時期にわたって遺跡が営まれたことが明らかにされた。さらに、「警前村印」と刻印された銅印と器表面全体を漆の沁み込んだ麻布で被覆されたほぼ完形に近い白磁四耳壺が同一の井戸状遺構から出土した。地名を刻印したと推定される銅印の発見は、奥州藤原氏の統治システムを考察する上で貴重な資料となるばかりでなく、本邦の印章史の空白期を埋める資料として注目された。

平成12年度の第52次調査では、園池周辺域の中心建物群とは異なるエリアから、建物の軸線の異なる大型の建物が検出された。これは、時期を異にして大形の建物で構成される複数の地域が存在したことであり、柳之御所遺跡の遺構の変遷を考えるうえで重要な課題を提示した。中心域の移動がおこなわれた背景には、平泉あるいは奥州藤原氏内部での何らかの重要な転換期を反映している可能性が考えられる。

また、柳之御所遺跡は従来まで遺跡のピークが三代秀衡の治世12世紀第三四半期にあることが指摘されてきたが、新たに12世紀初頭あるいは前葉に位置づけられる一群の土器群が発見されたことで、当遺跡が12世紀前半代初代清衡の時期まで遡ることが明らかになった。これは、政庁「平泉館」の性格あるいは、奥州藤原氏の平泉での確立期の状況を推定させる重要な発見である。

平成13年度の第55次調査では、新たに園池の北側に大規模な建物の存在が明らかとなり、柳之御所遺跡の中核施設の移動が想定されるようになった。また、初代清衡の時代である12世紀初め頃のかかわりがまとまって発見され、柳之御所遺跡の開始年代と遺跡の性格、ひいては平泉奥州藤原氏の設立期の問題を考える上で非常に大きな問題を示唆することとなった。

平成14年度の第56次調査では、遺跡中核部を囲む2条の堀跡の遺跡調査を実施し、遺跡北部より30数基のトイレ状遺構が集中して見つかるなど、当時の生活の様子を具体的に分析できる資料が発掘された。また、平泉では初めてとなる中国南部の吉州窯製の陶器片も出土し、奥州藤原氏の経済基盤の豊かさを知る手がかりとなった。

平成15年度の第57次調査では、第23次（平成元年度）の調査で造り替えが確認されていた、園池についての詳細な規模や造成時期の把握及び堀跡の遺跡と門跡の確認、高館南側部分の遺構分布の確認を目的として調査を実施した。調査の結果、堀跡及び門跡を確認することはできなかったが、高館南側部分も北上川の侵食により遺構が失われていること、旧園池の造成時期や北半部の汀線が明らかとなった。

平成16年度は第3次三ヶ年計画の初年次に該当し、通次で第59次調査に相当する。この調査では、以前から指摘のあった中心建物群の規模や新旧関係の確定を主な目的として、建物規模や遺構の切り合い関係などについて一定の見通しを得ることができた。

2 本年の調査について

〔1〕平泉遺跡群調査整備指導委員会

当教育委員会では、平成10年度から柳之御所遺跡の内容確認調査を再開するにあたり「柳之御所遺跡調査研究指導委員会」を設置し、柳之御所遺跡及び平泉遺跡群の発掘調査及び調査研究に対して指導助言を得てきた。平成12年に「平泉の文化遺産」が世界文化遺産の暫定リストに追加登録されたことから、会の名称を

「柳之御所遺跡調査整備指導委員会」に改め、さらに平成15年度は世界遺産本登録に向けたコアゾーン再検討の必要性から「平泉遺跡群調査整備指導委員会」と改称した。

平成17年度は以下の内容で委員会を開催した。

- (1) 第1回平泉遺跡群調査整備指導委員会（平成17年7月7日～8日）
 - ・柳之御所遺跡整備計画について(整備予定遺構の検討、遺跡中心域の解釈について等)
 - ・現地指導（柳之御所遺跡・無量光院跡・衣川流域遺跡群・長者ヶ原廃寺跡）
 - ・世界遺産登録関係について
- (2) 第1回遺構検討作業部会（平成17年9月8日）
 - ・整備課題の概略 ・遺構遺物の検討
- (3) 第2回平泉遺跡群調査整備指導委員会（平成17年10月13～14日）
 - ・園池や掘立柱建物など各遺構についての検討
 - ・現地指導（柳之御所遺跡・無量光院跡・衣川流域遺跡群・長者ヶ原廃寺跡・白鳥館遺跡）
 - ・世界遺産登録関係について
- (4) 第2回遺構検討作業部会（平成18年1月10日）
 - ・柳之御所遺跡の内容検討（復元建造物策定にあたっての前提事項の整理）
 - ・園池遺構変遷の解釈、整備対象遺構の年代観、55SX2の解釈、出土土壌の分析報告など
- (5) 第3回平泉遺跡群調査整備指導委員会（平成18年2月13～14日）
 - ・柳之御所遺跡整備計画について（整備対象遺構の年代観と根拠、堀内部の性格など）
 - ・平成17年度平泉遺跡群の発掘調査成果報告
 - ・「平泉の文化遺産」に関する包括的保存管理計画について

平泉遺跡群調査整備指導委員会

(平成18年3月現在)

氏名	役職	専門部会
入間田宜夫	前東北大学教授	整備
牛川 喜幸	京都橋女子大学教授	整備
遠藤セツ子	平泉町観光協会	整備
岡田 茂弘	国立歴史民俗博物館名誉教授	保存・整備
小野 正敏	国立歴史民俗博物館助教授	遺構
◎河原 純之	川村学園女子大学教授	
○工藤 雅樹	東北歴史博物館長	遺構・保存
齊藤 利男	弘前大学教授	遺構
佐藤 信	東京大学教授	保存・整備
清水 兼	東京工芸大学教授	遺構
清水 真一	東京芸術大学教授	遺構
関宮 治良	平泉町商工会事務局長	整備
田中 哲雄	東北芸術工科大学教授	保存・整備
田辺 征夫	独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所所長	遺構
玉井 哲雄	千葉大学教授	遺構
西村 幸夫	東京大学教授	保存

※ ○委員長 ○副委員長

※ 専門部会 遺構・・・遺構検討部会、保存・・・保存管理計画検討部会、整備・・・整備検討部会

〔2〕調査の目的と方法

平成17年度の第64次調査は中心建物域から約20m南に確認されている圍池の調査を実施した。今回の調査は、今後おこなわれる整備復元に必要な情報を得ることを目的として行い、既調査で明らかになっていた新旧池跡の構造や昨年度のトレンチ調査で確認されていた旧池跡にともなう孤立柱建物の規模、池内で確認されている溝の解釈などについて既ねの解釈を得ることができた。

発掘調査にあたって昭和63年度の（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが行った緊急発掘調査の際に設定したグリッドに従った。グリッドの呼称についても同様である。

基本的には遺構の内容把握を主目的にしている。遺構の所属時期の確定・遺構の性格等を把握することを最優先しており、検出した遺構すべてを最終的な段階まで精査しているわけではない。なお、半截あるいは完掘した遺構については砂で埋め戻し、遺構面を覆い、可能な限り元の状態に復旧し保存を図っている。

柳之御所遺跡発掘調査年次計画

年次	調査回数	調査面積	調査期間	予算（千円）	備考	
第1次3カ年次計画	平成10年度	第49次	500㎡	5月15日～ 10月31日	18,211	国庫補助
	平成11年度	第50次	1,800㎡	5月13日～ 10月31日	32,236	国庫補助
	平成12年度	第52次	2,500㎡	5月15日～ 11月17日	43,341	国庫補助
第2次3カ年計画	平成13年度	第55次	3,100㎡	5月11日～ 11月13日	46,103	国庫補助
	平成14年度	第56次	4,000㎡	5月13日～ 11月29日	52,706	国庫補助
	平成15年度	第57次	4,000㎡	5月14日～ 10月31日	51,892	国庫補助
第3次3カ年計画	平成16年度	第59次	3,500㎡	5月10日～ 10月31日	44,695	国庫補助
	平成17年度	第64次	2,500㎡	4月15日～ 9月30日	36,592	国庫補助
	平成18年度	第65次	1,500㎡	5月8日～ 10月31日	34,261	国庫補助

※ 平成17年度までは実績、18年度以降は予定

柳之御所遺跡発掘調査年次計画

	年 次	年 次	年 次
第1次 3カ 年次 計画	平成10年度	第49次	<ul style="list-style-type: none"> ・堀内部地内の中心建物群、特に最大建物である南北棟4間9間42SB1（28SB4と一部重複）の東側地区の解明。 ・23次調査時の23SB2建物跡の延長確認。 ・23SA3柱列跡、23SA1堀跡の延長確認。 ・48SB1建物跡の延長確認と所属時期の検討。
	平成11年度	第50次	<ul style="list-style-type: none"> ・池跡及び中心建物群を囲む23SA1堀跡の追跡。 ・4間9間の南北棟の東側の状況及び建物群の伸長。 ・42SD1大溝とされていた遺構の時期及び伸展状況追跡。 ・37次、42次の内容確認調査に確認されていた溝・堀類の時期及び伸展状況の把握。
	平成12年度	第52次	<ul style="list-style-type: none"> ・堀内部地区、中心建物群の西側及び北西側地域の解明。 ・祭祀遺構周辺域の解明。 ・無量光院との対峙地域の解明。 ・堀外部地区から延長すると推定される道路遺構の解明。
第2次 3カ 年次 計画	平成13年度	第55次	<ul style="list-style-type: none"> ・中心建物群の北側地区の解明。 ・中心建物群を囲むと推定される堀跡の検出。 ・堀外部地区から延長すると推定される道路遺構の解明。 ・現存する微高地状の高まりの性格把握。 ・北上川縁地域の状況把握。
	平成14年度	第56次	<ul style="list-style-type: none"> ・第52次発掘調査の際に検出された大規模な堀（内堀）と張出施設を伴う溝の追跡。 ・北上川右岸縁での大型建物の展開の把握。 ・遺跡を二分する外堀の追跡。
	平成15年度	第57次	<ul style="list-style-type: none"> ・旧池跡の規模と造成時期の把握。 ・遺跡中核を囲う堀の追跡調査及び門跡の確認。 ・高館南側裾部分未調査地域の遺構分布の確認。
第3次 3カ 年次 計画	平成16年度	第59次	<ul style="list-style-type: none"> ・中心建物群の規模と新旧関係の解明。 ・園池北部の構造及び規模と造成時期の把握。 ・北上川縁地域状況把握。
	平成17年度	第64次	<ul style="list-style-type: none"> ・園池の構造及び規模と造成時期の把握。 ・池跡から東側への建物等の展開状況の確認。
	平成18年度	第65次	<ul style="list-style-type: none"> ・31SB5及び周辺遺構の再確認。 ・55SX2構造の把握。

※ 第51次・53次・54次・58次・60～63次調査は平泉町教育委員会が実施。

II 自然環境

1 位置

柳之御遺跡の所在する西磐井郡平泉町は、北は奥州市、南は一関市に接する岩手県南部に位置し、面積は63.39km²、人口は約9,000人（平成17年3月現在）である。

町内にはJR東北本線、国道4号、東北縦貫自動車道などが南北に通り、交通の要衝となっている。国宝指定第1号の金色堂や東稲山に代表される古い歴史と恵まれた自然環境があり、年間160万人以上の観光客が訪れる国内有数の観光地である。

気候は内陸型で寒暖の差は大きく、年平均気温は11.5℃とやや低いが、岩手県内では比較的温暖である。また、年間降水量は900mmと少なく、積雪も少ない。町のはば中央部には北上川が南流している。現在の北上川は本道跡の北側部分を浸食しているが、12世紀当時は今は若干異なった流路を持ち、物資の輸送に重要な役割を果たしていたと推測できる。

本道跡はJR平泉駅から北に約700m（徒歩10分）にあり、市街地から続く段丘の北東平坦地で高館の南東に位置する。また、猫間が淵を挟み無蓋光院跡と隣接している。平成12年頃まで道跡は北上川に面していたが、現在は平泉下流堤防と国道4号平泉バイパスが建設されている。道跡は国土地理院発行5万分の1地形図「一関」及び2万5千分の1地形図「平泉」に含まれ、北緯38°59'37"、東経141°7'10"（世界測地系）付近にある。



第1図 平泉町位置図

2 地形・地質

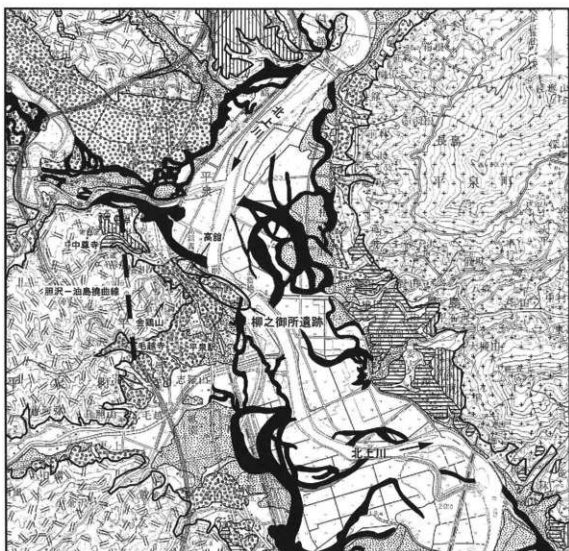
[1] 地形及び地質概要

平泉町は東部の東稲山山地（標高200～600m；北上山地の一部）、中央部の北上低地帯（標高20～40m）、西部の平泉丘陵（標高100～200m；衣川丘陵の一部）から構成される（第2図）。

東稲山山地は約2.5億年前（ペルム紀）の頁岩、恐竜が繁栄した約1億年前（白亜紀）の火山噴出物及び花崗岩類（東稲花崗岩体）などの中・古生層からなり、いわゆる基盤岩類と呼ばれる硬質の岩石である。北上低地帯は河成段丘、低湿地や自然堤防などからなる平坦地である。これらは主に氷河期やそれ以降に、北上川や支川によりもたらされた砂礫や泥（河川堆積物）が堆積した地域である。段丘面は住居、耕作地、商業地などに、低地帯は水田に利用されている。

平泉丘陵は、厚い火山噴出物（巖英層）、海に堆積した泥岩や砂岩（竜の口層など）及び河川や湖沼などに堆積した陸成堆積物（金沢層など）からなる。これらは日本列島形成期の約1,400万年～300万年前（新第三紀）に堆積した。竜の口層（かつての油島層）はクジラやカキの化石が、金沢層は亜炭を含むことが特徴である。亜炭は中尊寺付近でも採掘されていた。地層は概ね水平であるが、毛越寺から中尊寺にかけて胆沢-油島拗曲線と呼ばれる地層の急傾斜帯が分布する。胆沢-油島拗曲線は10万年程度前（後期更新世）まで断続的に変形運動したと推定されている（大石,1997）。

高館や金鶏山などの標高100m以下の小高い丘は、金沢層が河川の浸食から免れてできた残丘である。これらは比較的軟らかい砂岩、泥岩、凝灰岩からなる。



第2図 遺跡位置及び周辺の地形・地質概況図

(5万分の1地形図「水沢」「一関」に、地質図と野中氏の地形分類図を簡略化して編集)

〔2〕 段丘面及び旧河道

北上川西岸には数段の河成段丘が発達している。これらは高位よりT面群、H面群、M面群、L面群に区分され、それぞれ第2図に示す年代に形成したと推定されている(渡辺1991;野中,2005)。T面群は大上・吉田(1984)により一首坂段丘、H面群は上野原段丘・横道段丘、M面群は扇切段丘・福原段丘と呼ばれている。L面群は盛岡市、花巻市、北上市、水沢市、一関市などの中心市街地が立地する段丘面で、水沢から衣川にかけてのL1面は水沢高位段丘、L2面は水沢低位段丘と呼ばれている。

平泉町中心部はL1面及びL2面（いわゆる平泉段丘）にあたり、金沢層の上に堆積した未固結の河川堆積物（砂・礫・粘土～シルト・有機物）からなる。

柳之御所遺跡は北西から南東に細長く、最大長約750m、最大幅約220m、面積は約11万㎡である。遺跡の北西部から中心部はL1面に位置し、標高は北西から南東に向けて低く、高館に接する付近で約38m、中心建物群付近で約27mである。南東部はL2面になり、標高は約25mで、東側の堀で約22mである。河川氾濫原のL3面は標高約21mである。L2面は縄文時代後期以前に形成され、平安時代前期までほとんど冠水することは無かったが、奥州藤原氏滅亡後の13世紀以降は北上川の洪水で冠水したと考えられている（野中,2005）。L2面に位置する遺跡は柳之御所遺跡の他に、伽羅御所跡、泉屋遺跡などがある。

3 遺構面以深の土層序

平成16年度に実施したボーリング調査から、遺構面以深の上層序が明らかになった(岩手県教育委員会事務局,2005)。柳之御所遺跡は、約2万年以前に北上川などからもたらされた河川堆積物を基礎地盤としている。主に洪水時の堆積物であるため、同一土層の消長は激しいが、おおむね以下のようにまとめられる。地下水の汲み上げ能力が良い砂礫層は約5～8m以深に分布する。

土層名	遺構面からの深度 (m)	厚さ (m)	特 徴
粘土～砂質シルト	直下	約2～5	風化部は黄褐～灰黄色、新鮮部は青灰色を呈する。粘土と上方細粒化した砂質シルトの互層である。遺跡の北西部では有機質粘土を挟む。
中 砂	約2～5	1.4以下	青灰色を呈し、石英や長石などの径0.5mm弱の中粒砂を主とする。地下水の透水性は中位。遺跡の中央付近に分布する。
粘土～砂質シルト	約3～5	約1	青灰色を呈す粘土と砂質シルトからなる。遺跡の中央付近では有機質粘土を挟む。
シルト質砂～細砂	約4～6	約1～2	黄灰～青灰色を呈し、結晶片を主とする細砂とシルトからなる。
シルト質砂～細砂	約4～6	約1～2	主に径3～150mmの安山岩礫、中～粗砂及びシルトからなる。赤褐～暗青灰色を呈し、全体に不均質である。地下水の透水性はやや高い。

<引用文献>

- (1) 大石雅之(1997)『平泉町における新第三系鮮新統と海成哺乳類化石』平泉町史 自然編・民俗編(一)、平泉町。
- (2) 渡辺満久(1991)『北上低地帯における河成段丘面の扁平および後期更新世における岩屑供給』第四紀研究, 第30巻。
- (3) 野中奈津子(2005)『柳之御所付近の沖積地の河川氾濫と河道痕跡の検出 -地形学的手法を用いて-』平泉文化研究年報, 第5号, 岩手県教育委員会。
- (4) 大上和真・吉田 充(1984)『北上川中流域, 胆沢扇状地における火山灰層序』岩手大学工学部研究報告, 第37巻。
- (5) 岩手県教育委員会事務局(2005) 柳之御所遺跡地内地質調査業務委託報告書。



番号	遺跡名	所在地	調査状況	種別
1	柳之御所遺跡	宇柳御所	一部調査	居館
2	高館跡	宇柳御所	一部調査	居館、城館
3	猫間が淵跡	宇柳御所	一部調査	沢跡
4	伽羅之御所跡	宇伽羅楽	一部調査	居館、屋敷地
5	無量光院跡	宇花立	一部調査	寺社
6	花立Ⅰ遺跡	宇花立	一部調査	寺社、城館
7	花立Ⅱ遺跡	宇花立	一部調査	寺社
8	白山社遺跡	宇鈴沢	一部調査	寺社、屋敷地

第3図 柳之御所遺跡周辺の遺跡分布図

Ⅲ 検出された遺構と遺物

1 園池跡と付属施設

23SG1園池跡は柳之御所遺跡期内部地区のほぼ中央を占地している中心建物群の南西側にあって、堀23SA1の東辺から西へ65.5m～95mの範囲にある。長軸が南北方向にあり、最大長40.5m±、最大幅32.4m±である。

23SG1園池跡は一園池水池事業・平泉バイパス建設関連の発掘調査で検出され、一部調査が行われていた。その際の調査で12世紀代には大きく2時期の変遷がある（古い方からⅠ期～Ⅱ期）こと、その後Ⅱ期園池東部の一部を埋め戻す形で塞いでいること（それをⅡ期以降とする）などが明らかとなった。

岩手県教育委員会では柳之御所遺跡整備にもないⅡ期を中心とした園池構造の解明を目的に、平成15年度から3年にわたり部分的にはあるが継続して調査を実施してきた。平成15年度の57次調査では主にⅠ期園池の構造と範囲の確認に重点を置き、園池の北半部を精査した。平成16年度の59次調査では園池の南東部ほかを調査した。平成17年度の64次調査ではⅠ期池に伴う橋跡の調査と、池南西部を調査するとともに池全体の測量を実施した。なお、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下、岩手埋文）の調査ではⅡ期以降としていた段階をここではⅢ期として扱っている。

出土物に関してはこれまでの出土遺物と混同しないためにYG59SG1〇〇やYG64SG1〇〇と注記しているが、23SG1から59次調査で出土したもの、64次調査で出土したもののことである。遺物重量については59次・64次調査分を合算したものである。また、調査場所についても59T〇〇や64T〇〇と表示しているが、59次調査で23SG1内に設定したトレンチという意味である。

<59次調査>

59T1a（第6・7図）

75～81グリッド周辺、池の南東部に設定した。緊急発掘調査時の報告書では断面M-M'としている部分を再度削り、地山面まで掘り抜いて記録を取り直した。

Ⅰ期 14・16層が古い池（Ⅰ期）の堆積層と判断した。底面は小さな凹凸が認められるところもあるが概ね平坦で（標高24.80～24.75m）、東側は緩やかに立ち上がっている（標高24.90m）。一方、西側は溝跡に切られているものの池の立ち上がりの角度は東側とほぼ同様であったと思われる。9～12層はⅠ期より古い溝跡と解釈している。

Ⅱ期 7・8・15層が新しい池（Ⅱ期）を構築する際の盛土、6・13層が池の堆積層である。底面は6層部分が一番低く、大きな隙が密に分布しているところから東側の護岸へは緩やかに立ち上がっている。6層の最下面で標高24.55m、15層の上面で25.40mを測る

Ⅲ期 断面T1a付近においてⅡ期を一部埋め立てるかたち塞いでいる。5層がその埋め立てた土、1～4層がその後堆積したものである。

出土遺物（写真図版19） かわらけの細片は多く出土（7.382g）したが、固化できるものはなかった。他に丸瓦片（3003）が1点出土している。

59T1b（第6・7図）

74～82グリッド周辺、池の南東部に設定した。

Ⅰ期以前 16～19層からなる溝跡が認められる。15・21層がⅠ期池の堆積土と思われる。とくに15層は溝の

上に乗っていたために沈んだ状態になっている。Ⅱ期池の盛土である11～13も同様に窪んでいる。この溝は過去の調査では31S D59としていた溝である。16～19層はグライ化しており、自然堆積である。

I期 15・21層がⅠ期池に堆積した土と考えている。基本的に底面は地山である。底面から岸への立ち上がりは盛土され緩やかに立ち上がるように整形されている(24～26層)。底面は平坦である。21層下面での標高は24.58m～24.75mで、池北側に比べて標高が低い。このことから31S D59もⅡ期の排水溝として溝の上面だけが使われていたとも解釈できる。

Ⅱ期 Ⅰ期の池を埋め立てたてて護岸や底面を造りだした土が、11～13層や20・23層に相当する地山ブロックを主体とする人為堆積層である。柔らかい溝の堆積土の上に盛土がのっているために11～13層などは少し窪んだ状態になっていた。

盛土には基本的に表面に10cm前後の河原石が散在しており、池が機能していたときには、もっとまとまって敷かれていたと思われる。7～10・14層は池の堆積土で泥質及び砂質シルトが交互に沈殿した水性堆積である。Ⅱ期池の底面は14層と21層の間で標高24.80m、23層の上面で24.90mを測る。

Ⅲ期 過去の調査で指摘されていたⅡ期以降に堆積した土については既に掘りあげられており、このトレンチ内には残っていない。7層や23層の上面ののっていたことになる。これとは別に1～6層からなる溝もⅡ期以降にできたものである。自然堆積で砂が多く一定の流れがあったことが分かる。

出土遺物 21層からはかわらけ細片が出土(97g)していたが図化はできなかった。

59 T 1 c (第7図)

トレンチT1aの北約5mに設定した。T1aで確認された溝(2～4層)を北側へ追跡したものである。1層が溝の埋土に相当する。溝はさらに北側へも数m延びているが、次第に浅くなって追跡できなくなる。

出土遺物 かわらけ細片が出土(1.182g)しているが図化はできなかった。

59 T 1 d (第9図)

トレンチT1aの北約4mに設定した。

I期以前 井戸が1基確認されている(59SE1)。平面は隅丸方形を基調とし、埋土は人為堆積(10層)である。検出で止めたので詳細は不明であるが、東側には井戸枠であろう部材が一部出土している。但しそのまま埋め戻した。12世紀中葉よりも古い可能性が高い遺構である。

I期 底面は平坦で、護岸へは緩やかに立ち上がっている。11層は底面直上に堆積した泥、7～9層は護岸へと立ち上がる部分に堆積した砂を主体とする層でかわらけも砂と共に流れ込んだ状態で多く出土した。下に井戸があり、窪んだ状態になっていたためこの地点に遺物が集まっているのであろう。

Ⅱ期 盛土(2・3・5・6層)をし、傾斜部(5層上面)には径10cm前後の河原石も敷かれている。1層がⅡ期池の堆積土である。4層は自然堆積でⅡ期池を造っている途中に出来て、埋め戻された溝と考えている。Ⅱ期池の埋土はこの地点では失われて残っていない。

出土遺物(第25・26図・写真図版11～14) かわらけの出土総重量は18.004gである。1～40及び59次調査表60～63のかわらけはⅠ期池に捨てられた状態で出土したものである。

59 T 1 e (第8・9図)

トレンチT1aとT1bとの間にある若干の高まり部分に設定した。地山面までは掘り下げていない所もある。

I期 地山を底面とし、平坦である。5層がⅠ期に堆積した土になると考えている。

Ⅱ期 I期池を埋め立てた土(盛土)は3・4・6層と考えられる。地山ブロックを多く含む人為的に入れられた土である。Ⅱ期池には2層(T1bの8層と同じ層)が堆積していた。

Ⅲ期 西側には溝ができ、9層が堆積する。その上位には1a・b層が堆積する。北側ではⅡ期池の盛土を切るように7・8層が人為的に入れられる。大小の河原石やかわらけ細片を多量に含んでおり、Ⅲ期池を切る様子はこの地点より少し東側に設定したT1fで明瞭に観察できた。過去の緊急発掘調査での報告でいう新しい段階のⅡ期池を塞いでいる上に相当する。この上位に1a・b層が堆積しているように見えたが、出土遺物に12世紀よりも新しいものは見られなかったため正確な時期は分からない。

59 T 1 f (第8・9図)

トレンチT1aの南、T1dの東隣にある不整な高まりに設定した。

I期 このトレンチではI期池の面までは掘り下げていない。3～5層より下は地山ではなく、I期の埋土と考えている土になる。

Ⅱ期 4・5層が盛土に相当し、礫が散在する。その上位にⅡ期池の堆積である1・2・3・6層がのる。

Ⅲ期 北側ではⅡ期池の盛土及び堆積層を切って、礫やかわらけ細片を多量に含む7層が人為的に入れられている。これは緊急発掘調査での報告書でいうⅡ期池を塞いでいる上に相当するが、出土遺物には12世紀よりも新しいものは含まれていなかったため、正確な時期は特定できなかった。

59 T 2 (第10図)

園池北半の西側に設けた。57次調査でのT3-A・Bを拡張し、1本の断面図を作成できるようにしたものである。

I期 排水溝(31S D58)が検出されている。両壁面は板によって造られているが、溝の底面は地山を掘り込んだだけである。57次調査ではさらに約28m西側の部分でこの溝の延長が確認されている。この先は地形的な要因で自然消滅する。この溝にともなう埋土が5・6層である。底面の標高は24.78mを測る。

Ⅱ期 地山直上に薄く見られる自然堆積の2層がI期埋土かⅡ期にともなう埋土か判然としなかった。底面での標高25.17mをみるとI期池底にするにはあまりにも高く、また、この場合には排水溝よりもかなり西側に池が広がることになり不自然な位置関係に思える。しかし、今回の調査で確認できるI期池の水位標高の最高が25.36mであることを考えると2層の底面標高との比高差については矛盾を生じない。また、Ⅱ期池造成中に何らかの要因でできた層とも見ることができる。本来であればこの2層と後述する59 T 3の2層などとの関係を確認すべきだったが、遺構保護の観点から今調査ではそこまでは至らなかった。確証はないが2層はⅡ期以前またはⅡ期造成中の堆積と考え、57 T 1の5層と同様の土質をもつ1a・b層と4層をⅡ期盛土とし、この層を切る3層をⅡ期埋土として扱う。

出土遺物(第26図・写真図版14・15) かわらけの出土総重量は3,874gである。41～56はⅡ期盛土と考えられる1a・b層からの出土であり、穴あき石も1点出土している。

59 T 3 (第11図)

園池北半の中央西側に設けた。57次調査でのT2-A・Cを繋げて、一本の断面として観察できるようにしたものである。

I以前 57次調査で井戸が1基確認されている(57S E 3)。西側では15層以下、東側では13層以下が井戸の埋土である。

I期 排水溝(31S D58)が検出されている。西側断面で確認できる溝跡(12～14層)が東側断面では確認

できないことからⅠ期池に取り付け部分に限りなく近い場所にあたると思われる。底面の標高は24.84mを測る。その他にⅠ期にともなう埋土は、57T1の1層に酷似する東側断面10層と考えている。

Ⅱ期 59T2の1a・b層に相当する5層とトレンチ南側での7層がⅡ期の池を造成する際の盛土にあたる。北側では池底に貼ったと推測される河原石を含んだ1層を盛土とみた。このトレンチでは中央部分を残して北側と南側が低くなるように掘り込まれている。南側についてはⅠ期池の造作とも解釈できるが、北側については地業の目的、所属時期ともに不明である。あくまでも推測ではあるが59T2の2層と同様に南側掘り込み及びこの部分の埋土2～4層はⅡ期池の造成にともなうものと解釈した。

出土遺物 (第26・27・29図・写真図版15～17・21) 1～4層から比較的多くのかかわりが出土した。59T3のかかわりの出土総重量は9,144gである。個々のかわりけは完彩・破片が混在しており、口縁を上にしたものや伏せたもの、似たものなど一様ではなかった。7層出土は70・71・73である。2層からは木製品(修羅:4001)が出土した。出土した位置から園池造作(土や景石などの運搬か)の際に使われていたものと推測できる。

59T4 (第12図)

園池北半の東側にあたる75-77グリッド付近に設定した。T1aの北側約20mに位置する。土層断面は南壁と北壁で作成したが層位は対応させている。

Ⅰ期 底面は平坦に造られている。護岸は地山を一旦掘り込んだ後に緩やかに立ち上がるよう盛土整形(地山ブロックと砂からなる、4層、4a・b・c層、5層)をしている。池底には3層(黒褐色泥)が堆積し、岸へと立ち上がる部分には砂主体の2層が流れ込んでいる。底面標高は24.75mを測る。この他に、このトレンチでは地山面まで掘り下げた段階で4基の柱穴を検出した。この柱穴の詳細については次年度に追跡調査をしており、64SX1として後述する。

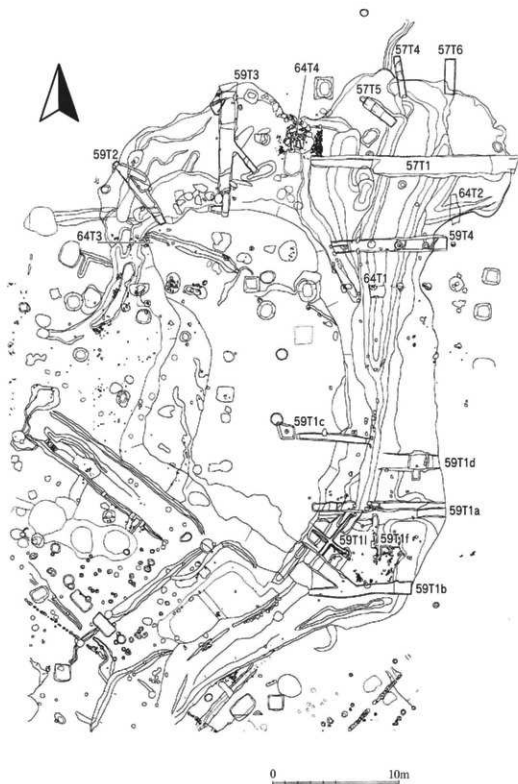
Ⅱ期 Ⅰ期池の堆積土のすぐ上に地山ブロックを主体とする盛土(1層、1a・1b層)をし、その上方を中心に河原石を配している。盛土はなだらかな尾根と谷間状の起伏を複数造りだすような形状をしていたようである。Ⅱ期池の底には7a・b・c層が堆積している。底面の標高は24.90mを測る。

Ⅲ期 Ⅰ・Ⅱ期の池を開析するように少なくとも3条の溝がみられる。Ⅱ期の盛土の谷間部分が深く削られたもので、土層断面からもその状況は容易に観察できる。最も東側の溝は地山までも削って深くなっている。3条の溝のうち、中央と西側の溝からは底面に近いところの壁に礫が並べられた状態で見つかった。これらの溝はⅠ期池以前に利用されていた溝(59T1a・bの断面でみられた深い溝)にあたると考えている。Ⅱ期池の廃絶後、再び開析されて溝になったようである。人工の溝または自然の溝に礫を並べたりして手を加えた溝と考えられる。6a・b層もこの段階のもので溝の護岸となっていた層である。

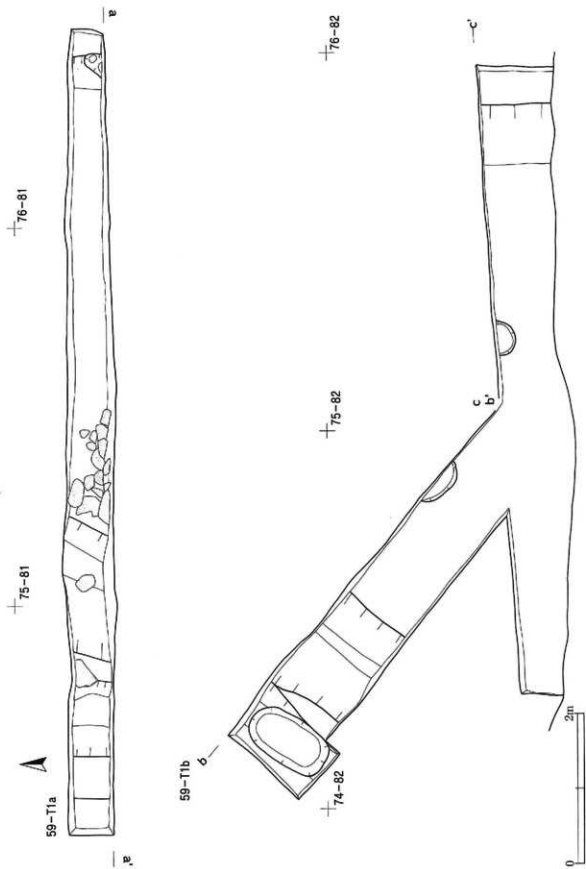
出土遺物 (第27図・写真図版17) かわりけの出土総重量は4,521gである。76のかわりけはⅠ期池に伴う。75と78はⅡ期池盛土の出土である。Ⅰ期池底からは他に渾美(もしくは常滑)産陶器の破片1点が出土、Ⅱ期池の盛土からは白磁片1点が出土している(57・59次報告書掲載)。



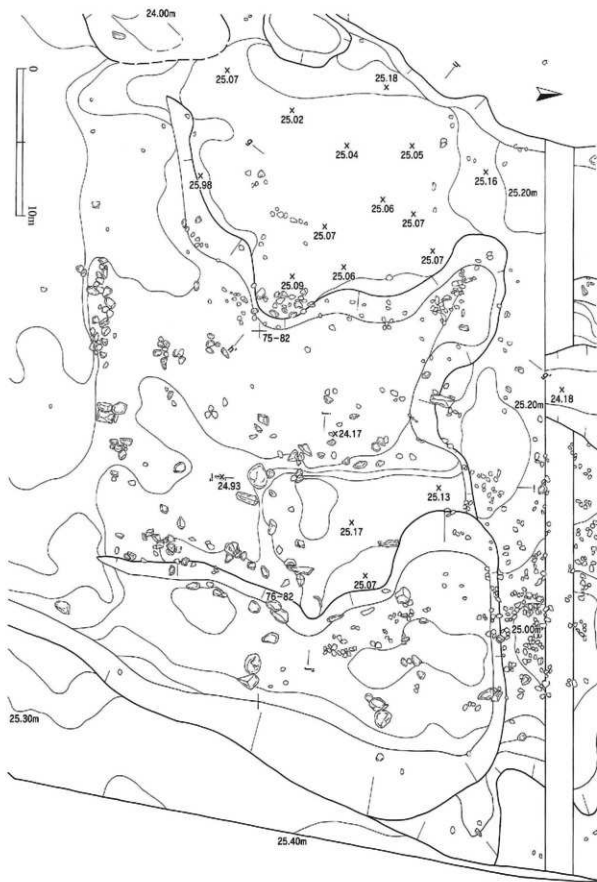
第4図 23SG1平面図（23次調査検出状況）



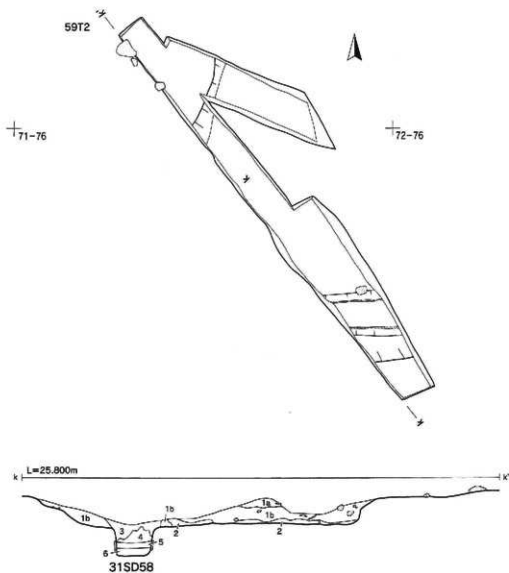
第5図 トレンチ位置図



第6圖 59T1a~T1b 平面圖



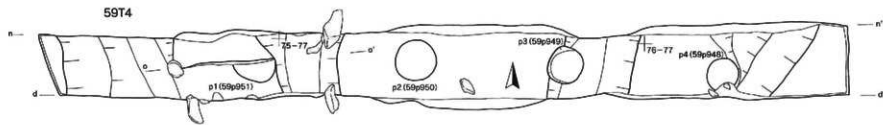
第8圖 59T1e~f 位置圖



59T2

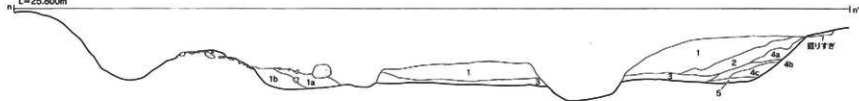
- 1a 25T7の南西角位置のブロンズ 1層の中心に置かれた 銅製の中心 礎石
- 1b 25T7の北西角位置のブロンズ 2層の中心に置かれた 銅製の中心 礎石
- 2 25T5の南西角位置の 銅製の中心 礎石
- 3 25T5の南西角位置の 銅製の中心 礎石
- 4 25T5の南西角位置の 銅製の中心 礎石
- 5 25T5の南西角位置の 銅製の中心 礎石
- 6 25T5の南西角位置の 銅製の中心 礎石

第10図 59T2 平・断面図



59T4 (北西)

L=25.800m



59T4北面 (ぬき出し)

L=25.300m

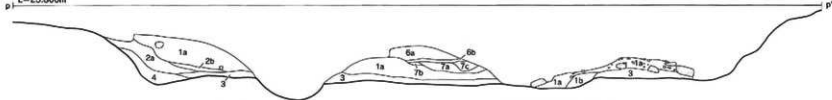


59T4 (北側) 内

- 1 3970-3980年頃のフクロフス器。その縁部は灰色土・赤褐色土を含む。器の中心部 縦径×横径 13.3x10.0cm
- 2 3970-3980年頃の 縁部が灰色土・赤褐色土を含む。縦径×横径 11.0x10.0cm

59T4 (南西)

L=25.800m



59T4 (南側)

- 1a 1号土坑
- 1b 3970-3980年頃の 灰褐色土・フクロフス器の 縁部・器の中心部
- 2a 土坑土坑
- 2b 3970-3980年頃の 縁部土層 (3970-3980年頃の 縁部土層) 縦径×横径 (径厚) 11.0x10.0cm
- 3 3号土坑

59T4 (北側)

- 1 4970-5000年頃の 縁部土層 (3970-3980年頃の 縁部土層) 縦径×横径 (径厚) 11.0x10.0cm
- 2 3970-3980年頃の 縁部土層 (3970-3980年頃の 縁部土層) 縦径×横径 (径厚) 11.0x10.0cm
- 3 3970-3980年頃の 縁部土層 (3970-3980年頃の 縁部土層) 縦径×横径 (径厚) 11.0x10.0cm
- 4 3970-3980年頃の 縁部土層 (3970-3980年頃の 縁部土層) 縦径×横径 (径厚) 11.0x10.0cm
- 5 3970-3980年頃の 縁部土層 (3970-3980年頃の 縁部土層) 縦径×横径 (径厚) 11.0x10.0cm
- 6 3970-3980年頃の 縁部土層 (3970-3980年頃の 縁部土層) 縦径×横径 (径厚) 11.0x10.0cm
- 7 3970-3980年頃の 縁部土層 (3970-3980年頃の 縁部土層) 縦径×横径 (径厚) 11.0x10.0cm
- 8 3970-3980年頃の 縁部土層 (3970-3980年頃の 縁部土層) 縦径×横径 (径厚) 11.0x10.0cm
- 9 3970-3980年頃の 縁部土層 (3970-3980年頃の 縁部土層) 縦径×横径 (径厚) 11.0x10.0cm

第12図 59T4 平・断面図

<64次調査>

64 T 1 (第13図・写真図版5)

59 T 4の調査にて検出された橋または建物遺構(64 S X 1)の性格を明らかにするために南側約3mの場所にトレンチを設定した。

I期 地山を底面とする3層がI期埋土である。底面標高は24.78mを測る。この層の下からは59 T 4で検出された柱穴の対になる柱穴(P 7)が検出された。本来ならこの層を切る柱痕跡を見つけることができたのかもしれないが確認はできなかった。

II期 I期池の堆積土のすぐ上に地山ブロックを主体とする盛土(1・2層)をし、上方を中心に河原石を配している。59 T 4の1・1 a・1 b層に相当する。

出土遺物(第27図・写真図版17) かわらけの出土総重量は柱穴P 7のものを含めて2,793gである。82のかわらけはI期埋土である3層から出土した。

64 S X 1 (第13図・写真図版6・7)

59 T 4・64 T 1内で柱穴南北1間、東西は4間にわたって検出された。間尺は南北で約11尺、東西は約7尺を基調としている。軸方向は東西で殆どぶれていない(N-90°-W)。橋の先(西側)、延長線上には金鶏山がある。掘り方は直径50~60cmのものが多く、最小は南東隅の28cmである。柱痕跡は確認できるものと掘り方埋土と見分けのつかないケースとがあった。検出面で確認できたものについては径21~28cm前後が多かった。断面観察をした4基の柱穴についても似たような値を示したことから7~9寸程の柱材を用いていたといえよう。柱穴の深さは池底にあたるP 7と8では遺構保護のため完掘していないので40cm以上とまでしか判らない。陸地にあたる地点のP 9では34cm、P 5では20cmと浅かった。遺構検出面はI期池となる。次のII期池の段階には廃されていたことも判明した。

遺構の規模については東西南北方向いずれも遺構は延びていなかった。しかしながら、西側だけはもう1間分柱があったと考えた方が自然である。東端部のように陸地にある浅い柱穴2基のように、西端部も陸地部分にあたる場所に柱穴を2基想定して考えたい(注意して探したが見つからなかった)。この想定した場所はII期池やIII期池の段階に開削されたところなので、浅い掘り方が失われてもおかしくないのである。

この遺構については上記の内容から南北1間×東西5間の掘立柱式の橋跡を想定した。時期はI期池の段階となる。遺構名は64 S X 1とする。

64 T 2 (第14図・写真図版7)

64 S X 1橋跡が北側に広がっていく遺構なのかを確認するために、東端の柱穴2基の北側にトレンチを設け地山まで下げて確認した。その結果、遺構は広がっていなかった。

I期 他の地点とほぼ同じで、概ね平坦な底面から緩やかに岸へと立ち上がっている。素掘りで石などを用いたりはしていない。6 a・6 b層がI期池の堆積土である。

II期池 1~5層には人為的な盛土の間に水成堆積層である4層が入り込んでおり解釈が難しい。このような堆積状況はこの部分でしか観察されなかった。57 T 1の1~4層と同様に小礫を少量含む1~3層と5層をII期盛土、4層は池構築の途中段階で流れ込んだものと考えている。

出土遺物 同化はしていないが1,800gのかわらけが出土し、その大部分が5層からの出土である。

64 T 3 (第14図)

64 S X 1橋跡の西端から西に15~20m離れたところに設定した。23SG 1の西側にあって幅が最も狭まる

部分である。64S X 1 橋跡とは別の橋があるかどうか、トレンチ内の大きな石が礎石建物の礎石となるかどうかを確認するために掘り下げた。

地山面まで掘り下げたが橋脚跡は無かった。トレンチ内の大きな石についても礎石では無いようであった。池景石のひとつであろう。64T 3 - 59T 4間の陸部分（Ⅱ期池では中島部分）では礎石のぐり石のような小石のまとまりが数カ所確認されていた。中島部分に持仏堂を想定する学説もあることから64T 3内の大きな石を含め注意して調査を行ったが、明らかにぐり石とみなせるものはなかった。それぞれの間隔も揃わなかった。

64 T 4と湧水地点（第14図・写真図版7・8）

池への導水の問題について、これまでは北側から池に達していた28S D 1を遺水とする見方があった。しかし、この溝も北端部が氷の湧き場所であったのかは発掘調査では判らなかつた。その一方で平成17年度に遺跡内数カ所においてボーリング調査を行いその結果、帯水層が複数層あることが明らかになった。

池跡の中でも北端で、地形的にも高い方になる74-74グリッド周辺の池護岸からは現在も水が染み出していることが64次調査中にわかった。その位置は第14図に示した2カ所で、池が殆ど干上がるといふ雨が降らない日が経っても水は染み出していた。前述したボーリングによって判った帯水層の中で最も上層のものの標高と、この水が染み出ているところの標高とがほぼ一致していることが判明し、池の水を自然湧水によって得ていたとする考え方も可能になってきた。そこで池が機能していたときの湧水地点を探ることとなり、現在も湧水のあるところに近い比較的大きな石を配置した範囲をトレンチ掘りしてみることにした。

Ⅱ期 この石組みはⅡ期池に伴うものである。北側の護岸と中島との間が最も狭くなるところに位置している。比較的大きな石が北と西に組まれ（約2 m 四方）、南側と東側には石がない。中央にも石はなく少し窪んだようになっていた。Ⅱ期池に水が入った場合、この石組みは水中に没するところにあること、湧水部分を石で囲んだような配置をしているように見えることなどから石組みの中を地山面まで掘り下げることにした。15cm前後掘り下げると地山（砂層）に達した。他の池底より深く地山を掘り下げていたわけではなかったし、調査中に水は湧いてこなかった。こうしたことからT 4の石組み部分が12世紀当時の湧水地点だったかどうかは可能性を指摘するにとどめておく。

池南西部の遺構の残りが悪い地点の調査（第15図）

岩手県文報告書によるとⅡ期池南西部については残りが悪い場所であったと報告されていた。そのためこれまで池南西部については自然消滅しているような表現の図面しかなく、残存状況を検証する記録が不足していた。そうしたなかでも緊急調査時に行った地形測量図を見ると、池には含めていなかった池の南西部に池底から岸への立ち上がり的一部と見られる地形があった。69-81から71-82グリッド付近である。

64次調査では前述した池底から岸への立ち上がりが再調査でも確認できるかどうか、残りの悪いと報告されていた部分（70-78-74-82グリッド付近）に池の痕跡が残っていないかを確かめるために調査した。

その結果、70-78から72-82グリッド付近の地山面には池底に堆積した泥や池底だったためにグライ化した地山面、Ⅱ期池に使われたと見られる盛土（黄褐色粘土と黒褐色土との混合土からなる）の一部が途切れ途切れではあるが残っていることが明らかになった。また池底から岸への立ち上がりと考えていた地形の高まりは再調査でも確認することができた。10数cmではあるが緩やかに立ち上がっていたのである。加えてこの池底の痕跡は、地形の高まりより南西側（池の外側）へは広がっていないことも判った。これにより今まで不確定であったⅡ期池南西部については、池底の痕跡が認められる範囲と地形の僅かな高まりの部分とをもってⅡ期池範囲とみなせる可能性が示された。

景石と州浜（第16～18図・写真図版8・9）

景石をはじめとした主な石組みについては23SG1を最初に調査した時が最も新鮮な状態であり、岩手県文報告書の中に丁寧に記載されているので参照して頂きたい。ここでは新たに作成した地形図を掲載し、州浜と考えている部分について補足説明する。

一つは池の北東端（75-74~77-76グリッド）の膨らんだ形のところである。他より緩やかに立ち上がる底面から岸にかけて小石が敷かれていた。石は長さ10cm前後の河原石で毛越寺庭園などの州浜の石に比べるとかなり小さい感じがする。隙間なく敷き詰められていたのかもしれないが、検出した段階では所々に盛り土が見えるほどの隙間があいていた。それでも他の場所に比べると石は密にあり、しかも大きさも揃っていることから州浜であった可能性は高い。

もう一箇所、東岸に沿って（75-77~76-80グリッド）も前述した北東端部分と同じく形・大きさの揃った小石が汀に敷き詰められており州浜であったときの雰囲気と比較的よく留めていた。北端部とあえて分けずに東岸一帯が州浜であったと考えた方が素直かもしれない。

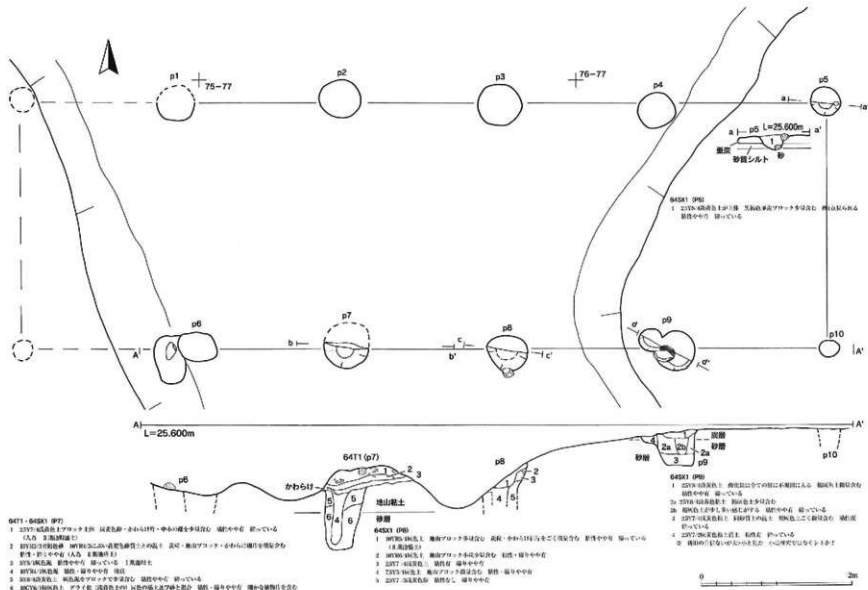
小石はⅡ期池のほぼ全域に濃淡はあるものの出土している。柳之御所遺跡は表土や遺構埋土に小石は基本的に入らないので、こういった小石は池に伴うものと考えてはほぼ間違いない。従ってⅡ期池はほぼ全域が汀に石を敷いていた可能性がある。また、池底についても粗密はあるもののⅡ期池底と想定される部分から粘土層に貼られた礫が確認できることから、Ⅱ期池には汀だけでなく池底全体が石敷きであったと考えられる。

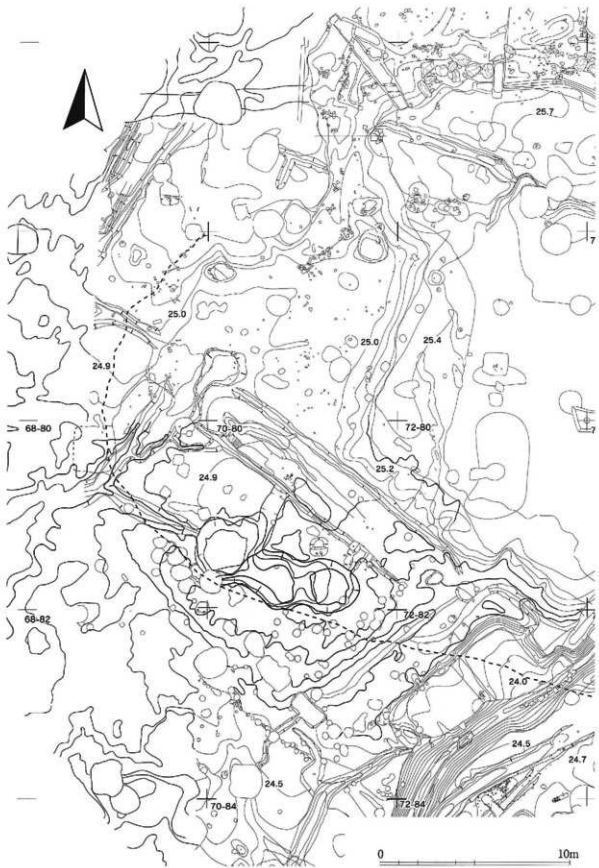
景石については、池北側にある程度の大きさをもつ石組が数箇所確認されている。このなかで、少なくとも中島北側の石組1と北側護岸の石組2及び中島北東側の石組3については、付近に抜き取り痕跡も見当たらないことから発掘調査で確認された位置から動いていないものと判断している。

石質表

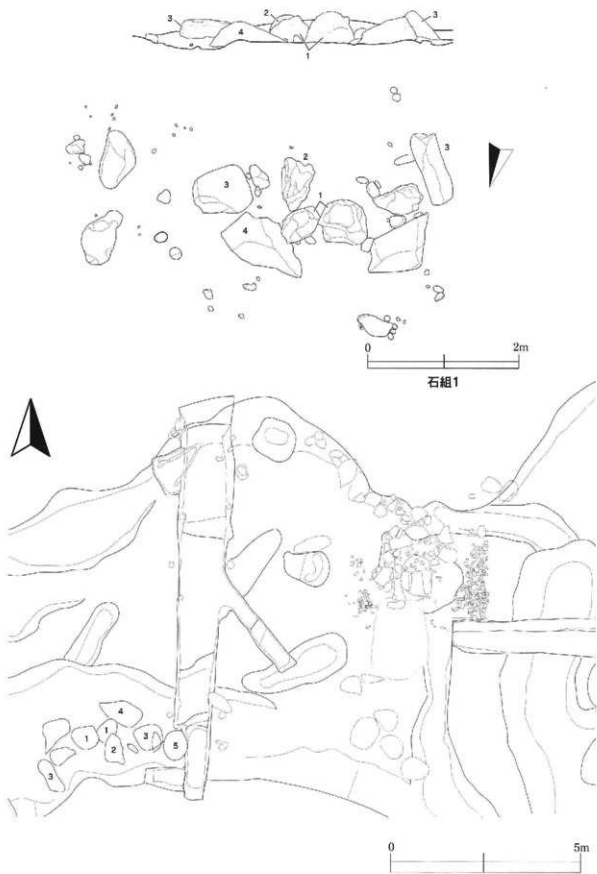
番号	石質	産地	位置	番号	石質	産地	位置
1	黒色頁岩	石巻市近隣産に類似	石組1	11	安産岩	東稲山周辺(北上川対岸)	石組2
2	砂質頁岩	石巻市近隣産に類似	石組1	12	凝灰岩	東稲山周辺(北上川対岸)	石組2
3	安産岩	奥羽山脈	石組1	13	黒色頁岩		石組2
4	凝灰岩		石組1	14	安産岩		石組2
5	石英安産岩	東稲山周辺(北上川対岸)	石組1	15	花崗岩		石組2
6	砂岩	宮城県	石組3	16	凝灰岩		石組2
7	安産岩		石組3	17	安産岩		石組2
8	花崗岩		石組3	18	砂岩		石組2
9	石英安産岩	東稲山周辺(北上川対岸)	湧水地か	19	砂質頁岩		石組2
10	花崗岩	東稲山周辺(北上川対岸)	湧水地か	20	黒色頁岩	北上山地南部	石組2

第13図 64T1・64SX1

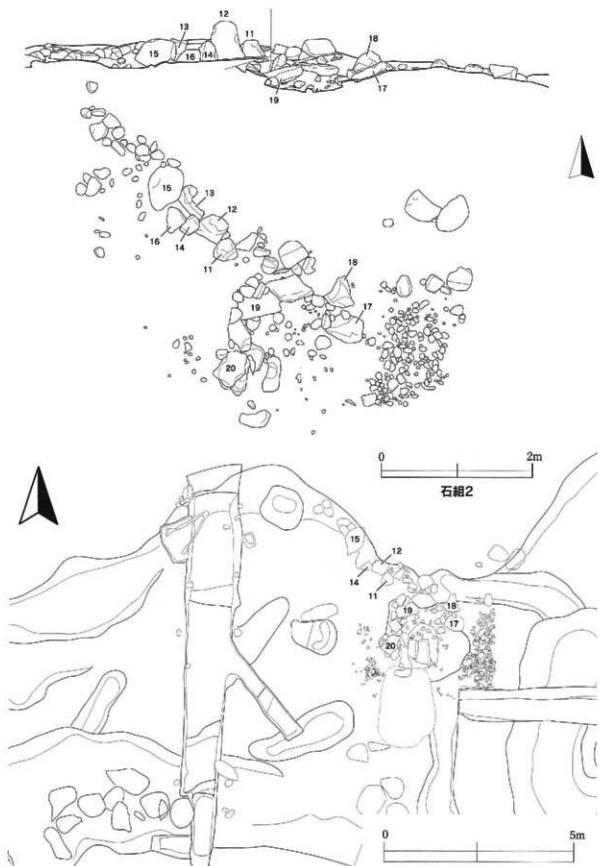




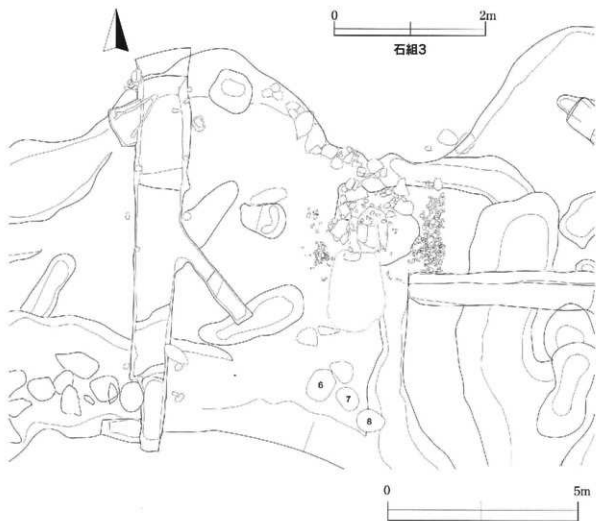
第15図 圃池南西部の地形



第16圖 石組1



第17圖 石組2



第18圖 石組3

2 その他に検出された遺構

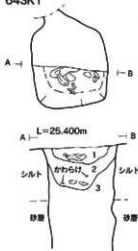
64SK1 (第19図・写真図版10)

69-77グリッドにあり地山面で検出した。開口部は1.1×1.0mの隅丸長方形を呈する。最上層の1層は自然堆積の可能性がある灰黄褐色土であるが、2層からは人為堆積で3層になるとグライ化が著しい。2層からは羽根が出土したが遺構保護のため取り上げず残してきた。検出面から約1.5m掘り下げたが底面には達していない。廃棄坑であろう。

64SK2 (第19図・写真図版10)

72-83グリッドにあり地山面で検出した。径1.1m、深さは最大で28cm、底面は概ね平坦であった。埋土は人為堆積で固化不能なかわかけ片が1点出土したのみである。23SG1と重複するが新旧関係は不明である。

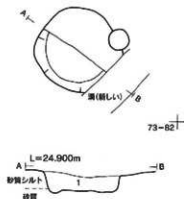
64SK1



64SK1

- 1 6975 3%炭素土・黒 地山面を埋め込む 灰黄色土層 埋まっている 自然に成り
 - 2 6975 3%炭素土 埋土のトップ部分 灰黄色土層 かわかけ片・遺構の土層と 埋め込まれた (人爲)
 - 3 6975 3%炭素土 埋土のトップ部分 灰黄色土層 かわかけ片・遺構の土層と 埋め込まれた (人爲)
- ※ 6975 3%炭素土の埋土はグライ化している (埋土の土層) 遺構・埋土の土層 (人爲) ともに埋め込まれた 埋土の土層と 遺構の土層と 埋め込まれた

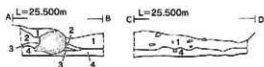
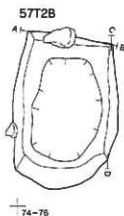
64SK2



64SK2

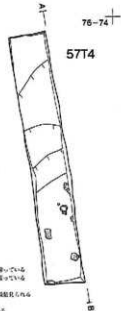
- 1 2377 3%炭素土 埋土のトップ部分 (埋土の土層) 埋め込まれた 埋土の土層と 埋め込まれた (人爲)
- ※ 2377 3%炭素土の埋土はグライ化している (埋土の土層) 遺構・埋土の土層 (人爲) ともに埋め込まれた 埋土の土層と 遺構の土層と 埋め込まれた

第19図 64SK1・2



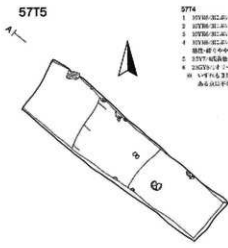
501T2B

- 1 25T7の南側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている
 2 外周の埋積層。堀内・外周の間に
 3 25T7の北側 堀内遺構。堀内中心部 埋まっている
 4 堀内中心部 埋まっている
 5 25T7の南側遺構の遺構
 6 堀内遺構の埋積層



57T4

- 1 25T7の北側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている
 2 25T7の南側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている
 3 25T7の南側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている
 4 25T7の南側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている
 5 25T7の南側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている
 6 25T7の南側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている

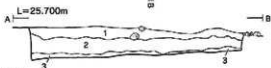
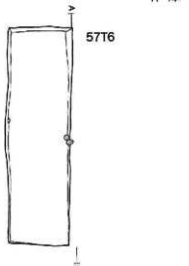


57T5



57T5

- 1 25T7の南側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている
 2 25T7の南側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている
 3 25T7の南側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている
 4 25T7の南側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている
 5 25T7の南側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている
 6 25T7の南側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている

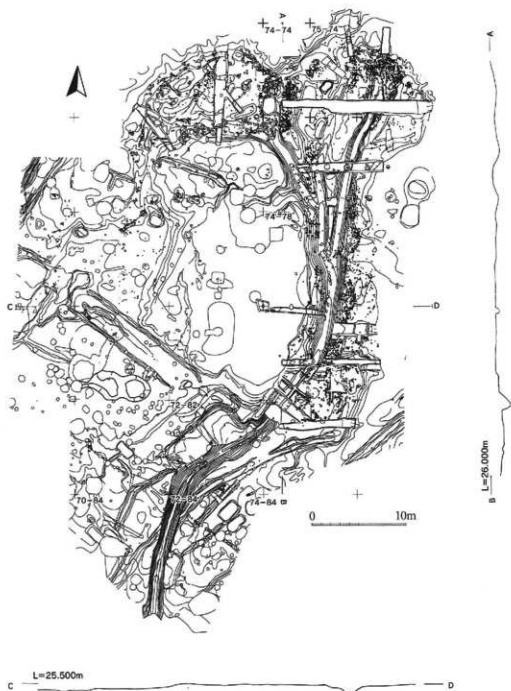


57T6

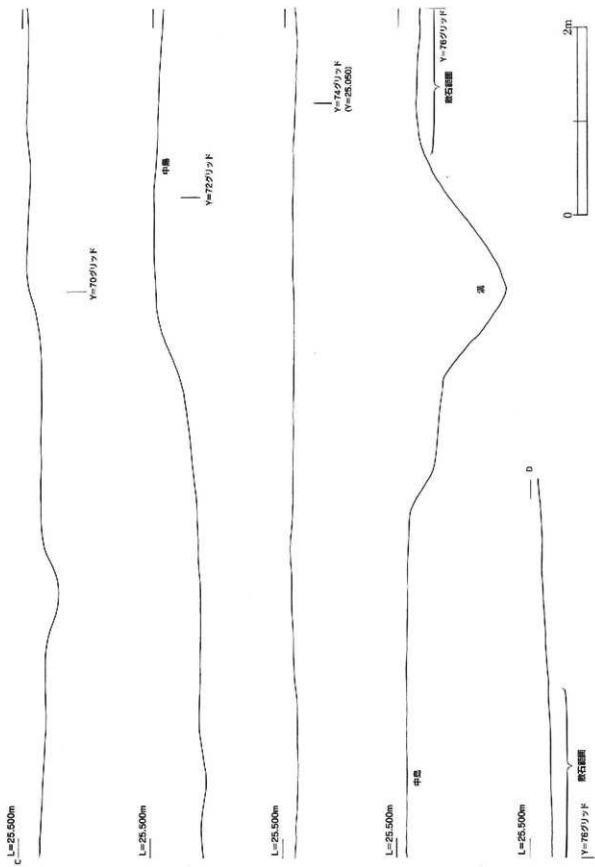
- 1 25T7の南側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている
 2 25T7の南側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている
 3 25T7の南側遺構。堀内遺構(北)・外周の埋積層を含む。堀内中心部 埋まっている



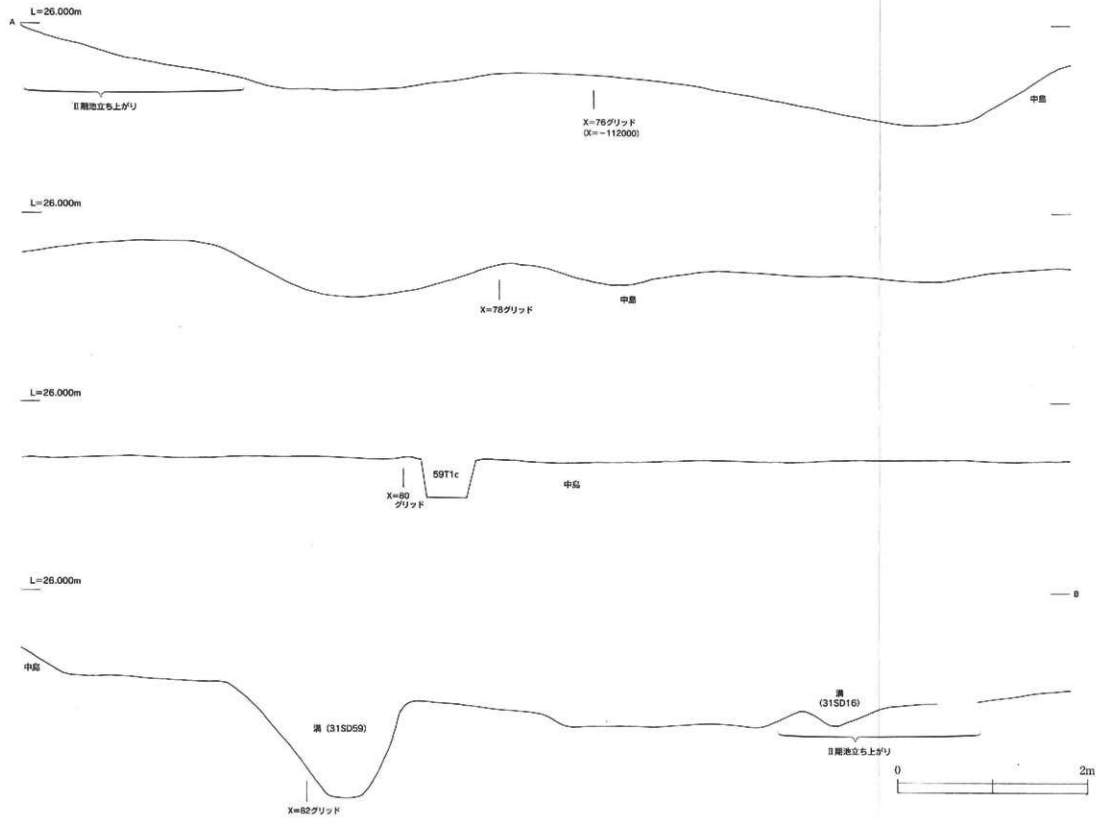
第21図 57T2B 57T4~T6



第22圖 23SG1縱橫斷圖



第24図 23SG1横断面



第23図 23SG1 縦断面図

3 出土遺物

59・64次で出土した遺物は、かわらけ（ロクロ・手づくね）国産陶器（常滑、瀬美、須恵器系）、輸入陶磁器（白磁）、瓦、木製品、石製品、羽口などがある。本文中では頁数の関係もあり、個々の遺物についての特徴は観察表に記してある。

かわらけ（第25～27図・写真図版11～19）

12世紀のかわらけは59・64次調査全体で59.204g出土している。出土したかわらけは遺構出土のものを中心に掲載し、それぞれの遺構の項目で出土状況を記載した。かわらけは手づくねとロクロかわらけに分けられる。そして手づくねかわらけは以下のように分類される。

C 3…2段まで、口縁部面取りなし

C 4…2段まで、口縁部をつまみ上げ

C 5…2段まで、口縁部面取りあり

D 2…1段まで、口縁部外反

D 3…1段まで、口縁部面取りなし

D 4…1段まで、口縁部面取りあり

その他に内折れかわらけがある。

ロクロかわらけについては特別、形態分類をしていない。

表中の法量は実測図上で計測した。よって反転実測で求められた数値を記している場合もある。重さは残存している重さである。色調は代表的な部分を記した。残存度は正確な測定値ではなく、表面積の残存率を目分量によって測ったものである。

国産陶器（第28図・写真図版20）

4点出土したが、池から出土したものは1002常滑のみで、残りは遺構外出土である。

輸入陶磁器（第28図・写真図版19）

2001は白磁壺類の破片である。未掲載資料はない。

木製品（第29図・写真図版21）

4001は修羅である。59次23SG 1・T 3で見つかり、次年度の64次調査の際に取り上げた。2層（Ⅱ期池造成にかかわる層）から出土しており、Ⅰ期からⅡ期へ造り替える際に埋められたものではないかと考えている。最大長140cm、最大幅76cm、径は約5.5cm前後で樹種はクリである。枝の分かれる部分を利用しつつ4カ所で2対になるように抉りを入れている。この抉りの部分に横木を渡して荷台としていたであろう。両端部は欠損しており本来の長さや形状は不明である。

番号	出土位置	分類	口径	底径	器高	重さ(g)	残存率(%)	備考
1	59Tld. 33	D 2	8.8	-	1.7	50	95	
2	59Tld. 1	D 3	8.5	-	1.7	54	100	
3	59Tld. 42	D 3	8.5	-	1.8	57	95	
4	59Tld. 45b	D 3	7.7	-	1.6	24	30	
5	59Tld. 24	D 3	9.1	-	1.6	53	95	
6	59Tld. 28	D 3	9.2	-	1.9	51	80	
7	59Tld. 11	D 3	9.3	-	1.8	62	80	
8	59Tld. 29	D 4	8.4	-	1.9	52	80	
9	59Tld.	D 4	9.5	-	1.9	54	60	
10	59Tld.	D 4	-	-	-	54	70	
11	59Tld. 19	C 3	12.6	-	2.5	110	60	
12	59Tld. 31	C 3	13.6	-	2.7	93	40	
13	59Tld. 25	C 3	13.0	-	3.1	156	90	
14	59Tld. 41b	C 3	11.9	-	2.2	19	20	
15	59Tld. 35	C 3	14.7	-	3.1	162	90	
16	59Tld. 21	C 3	12.7	-	2.9	114	100	
17	59Tld. 27	C 4	13.5	-	3.0	158	100	細砂多
18	59Tld. 39a	C 5	14.3	-	(3.0)	57	25	
19	59Tld. 39b	D 2	13.3	-	2.7	58	30	
20	59Tld. 22	D 2	13.0	-	2.6	112	90	
21	59Tld. 37	D 2	13.5	-	2.9	156	95	
22	59Tld. 36	D 2	12.6	-	2.4	124	95	
23	59Tld. 20	D 2	13.4	-	2.7	134	100	
24	59Tld. 12	D 2	12.8	-	2.8	108	75	
25	59Tld. 13	D 2	14.0	-	2.5	67	25	
26	59Tld. 15	D 3	12.9	-	3.2	162	90	
27	59Tld. 7	D 3	13.0	-	2.9	134	80	
28	59Tld. 2	D 3	14.1	-	2.6	62	30	
29	59Tld.	D 3	13.2	-	2.1	65	30	
30	59Tld. 9	D 3	13.9	-	2.9	122	95	
31	59Tld. 41d	D 3	13.3	-	1.7	38	30	
32	59Tld. 30	D 3	13.2	-	2.3	154	100	
33	59Tld. 18a	D 3	12.1	-	2.0	58	60	
34	59Tld. 26	D 4	12.9	-	2.6	144	95	
35	59Tld. 6	D 4	13.7	-	2.6	83	40	
36	59Tld. 32	D 4	13.6	-	2.6	162	95	
37	59Tld. 8	D 4	12.5	-	2.6	94	30	
38	59Tld. 17	D 4	14.5	-	2.5	77	30	
39	59Tld. 18b	D 4	13.3	-	2.4	42	20	
40	59Tld. 5	D 4	14.3	-	2.6	48	25	
41	59T2. 14	ロクロ小	8.9	5.9	1.8	71	80	骨針
42	59T2. 18	ロクロ小	10.0	6.7	1.7	41	45	骨針
43	59T2 (31SD58上面)	ロクロ小	8.9	5.4	1.6	54	70	骨針
44	59T2. 11	C 3	8.8	-	1.9	63	95	
45	59T2. 17	D 3	8.5	-	1.6	57	95	
46	59T2. 16	D 3	9.2	-	1.9	54	100	
47	59T2. 12	D 3	9.2	-	1.8	62	95	
48	59T2. 6	C 4	12.9	-	3.2	176	95	
49	59T2. 7	D 3	13.5	-	2.6	66	45	
50	59T2. 12の下	D 3	13.2	-	3.0	74	30	
51	59T2. 13	D 3	13.8	-	2.9	124	100	良
52	59T2 (31SD58上面)	D 4	13.0	-	3.1	129	70	
53	59T2. 9	D 4	13.1	-	2.2	69	50	
54	59T2. 4	D 4	13.2	-	3.2	149	80	
55	59T2. 5	D 4	13.5	-	3.0	174	100	
56	59T2. 2	不明	12.8	-	2.9	124	100	良
57	59T3. 5~7層	ロクロ小	8.9	6.6	1.6	42	50	
58	59T3. 8	ロクロ小	9.0	6.8	1.2	28	40	
59	59T3. 3	ロクロ大	14.1	7.8	3.0	200	90	骨針
60	59T3. 5~7層	C 3	9.6	-	1.7	48	60	
61	59T3. 18	D 2	8.5	-	1.9	55	95	
62	59T3. 6	D 3	8.6	-	1.7	58	100	
63	59T3. 2	D 4	9.0	-	1.8	60	95	

かわらけ観察表(1)

番号	出土位置	分類	口径	底径	器高	重さ(g)	残存率(%)	備考
64	59T3, 1	C 3	14.0	-	3.0	202	100	
65	59T3, 4	C 3	13.7	-	2.6	168		良好な焼成と胎土
66	59T3, 10a	C 4	13.0	-	2.8	102	45	
67	59T3, 13	C 4	14.2	-	3.1	222	95	
68	59T3, 1~4層	C 4	13.1	-	2.7	46	25	細砂
69	59T3, 15, 1層	C 5	12.8	-	2.8	152	100	
70	59T3, 7層	D 3	13.7	-	2.9	71	40	
71	59T3, 7層	D 3	13.5	-	2.4	93	70	細砂多
72	59T3, 16	D 3	13.3	-	1.8	73	45	
73	59T3, 7層	D 3	13.0	-	3.1	68	30	良好な焼成と胎土
74	59T3, 5	D 4	13.8	-	3.0	206	100	
75	59T4, 1~4層	不明	9.0	-	2.2	39	30	
76	59T4, 3層	D 4	14.4	-	2.5	97	60	
77	59T4, 6層	D 2	13.5	-	2.1	52	25	
78	59T4, 7層	底面に穿孔				30		
79	59SK5埋土	ロクロ大	12.5	7.0	3.4	112	100	管針
80	59SK5, 2層	ロクロ大	12.8	6.2	3.1	92	40	管針
81	59SK5, 4層	D 3	8.3	-	1.8	41	75	
82	64T1 3層	D 3	12.5	-	2.8	142	100	良好な焼成と胎土
83	59T3 2層	C 3	14	-	2.5~2.6	184	100	
84	59T3 2層	D 4	13.1	-	2.7~2.9	146	100	良好な焼成と胎土
85	59T3 2層	D 4	13.4	-	2.7	134	95	
86	59T3 2層	C 4	13.4	-	2.9~3.1	160	95	
87	59T3 2層	C 5か	13.1	-	2.9	166	95	
88	59T3 2層	D 3	9.0	-	2.0	63	95	
89	59T3 2層	C 3	8.4	-	1.8	58	98	
90	59T3 2層	ロクロ大	13.3	6.8	3.4	192	100	
91	59T3 2層	ロクロ大	13.4	8	3.5	94	40	
92	59T3 2層	ロクロ小	8.4	6.7	1.8~2.1	79	100	
93	64T1 1~3層	ロクロ小	-	5.6	(20)	31	30	
94	64T1 1~3層	ロクロ小	-	5.5	(12)	44		
95	64T1 1~3層	ロクロ	-	6.2	-	41		
96	64P9埋土	D 3	12.8	-	2.6	99	95	
97	76-81E新池横底面	ロクロ小	8.0	6.2	1.7	67	100	
98	64SK1埋土	C 5	15.4	-	2.8	90	45	良好な焼成と胎土
99	64SK1埋土	D 4	12.4	-	2.0	73	25	
100	64SK1埋土	ロクロ小	9.4	7.3	1.8	87	95	
101	59SE1上面	D 4	13.3	-	2.6	120	95	
102	出土地点不明	C 4	13.8	-	2.7	88	50	

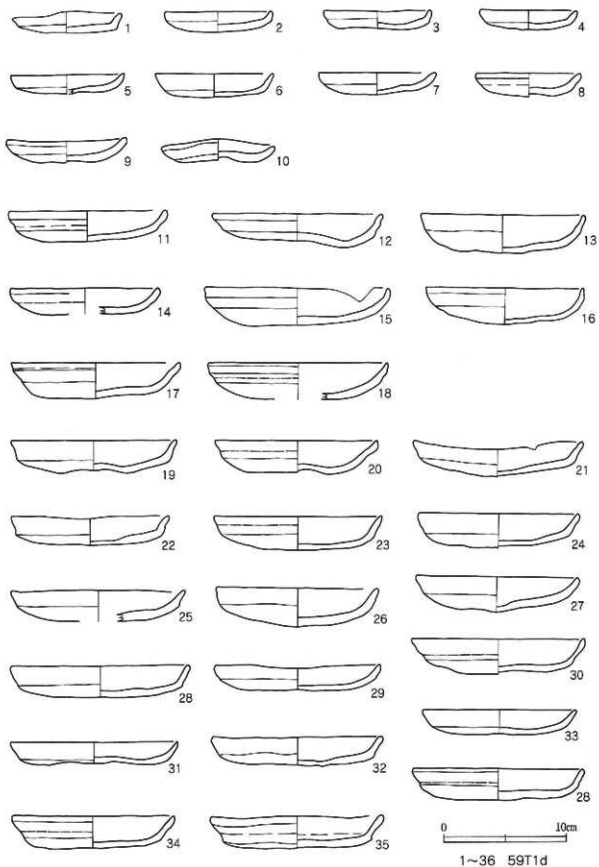
かわらけ観察表(2)

番号	種類	器種	部位	出土位置	年代など	その他	法量 (cm)		
							口径	底径	器高
1001	瀝美	壺	胴部	出土地点不明	12c				
1002	常滑	壺	体~底部	73-74 23SG1新期盛土	12c				
1003	須恵器系	壺か	体部	出土地点不明	12c				
1004	瀝美	不明	体部	池東無排土	12c				
2001	白磁	壺	体部	74-78中島 人為層	12c				
3001	瓦			73-76 池内又は井戸内	12c				
3002	瓦			64T1 1~3層	12c				
3003	瓦			75-81 59T1a 5・6層	12c				

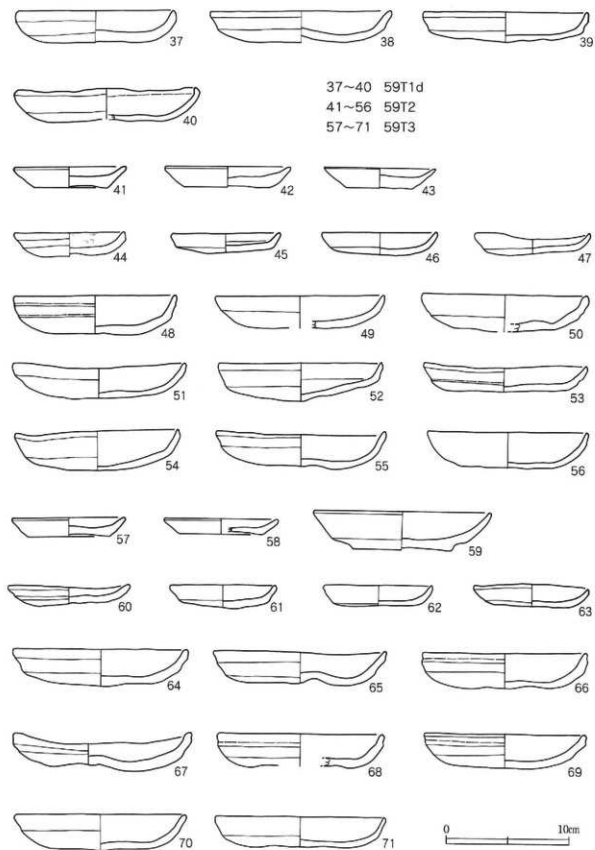
国産陶器・中国産陶磁器・瓦観察表

番号	器種	出土位置	法量 (cm)			樹種
			口径	底径	器高	
4001	修羅	59T3 2層	140	76	約5.5	クリ

木製品観察表



第25図 かわらけ(1)

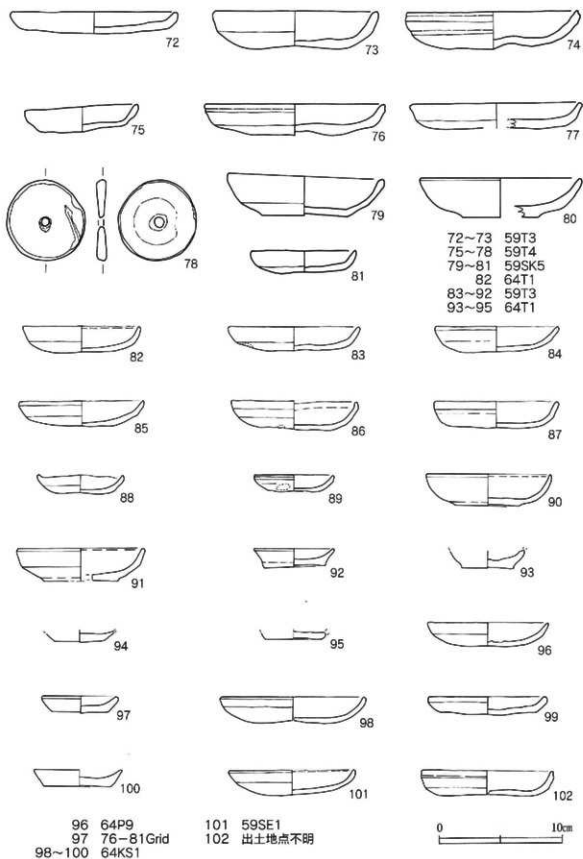


37~40 59T1d

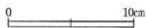
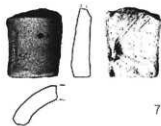
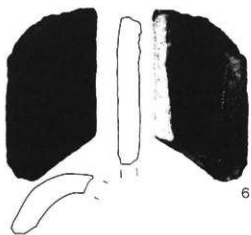
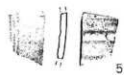
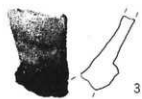
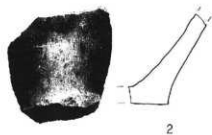
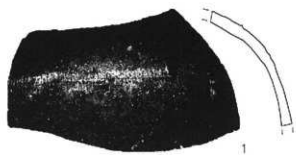
41~56 59T2

57~71 59T3

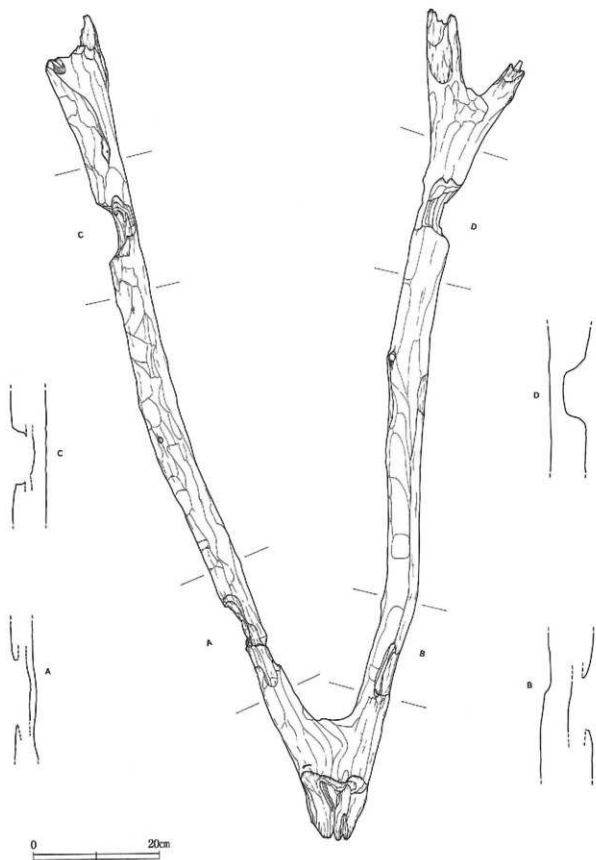
第26図 かわけ (2)



第27図 かわらけ(3)



第28图 国产陶器·中国产陶磁器·瓦



第29圖 木製品（修羅）

4 まとめ

園池23SG1について、これまでの調査内容を整理しておきたい。同時に調査成果から推測される園池の変遷についてもここで触れておく。

はじめに今回の報告と23次調査段階との考え方の共通する点、違う点について列記する。I期については概ね考え方に違いはない。あらたに64SX1が発見され、池の範囲についても調査が進展している。23次調査によるとII期の段階は大小の石と複数の溝からなり、形状は馬蹄形を想定していた。しかしその後の59・64次調査で複数の溝は池とは時期が異なることが判った。池の形状も中島を持つ石敷きの形状が推測される。23次調査ではII期池の次の段階について池の南東部にある溝が一部塞がれて水が南北に細長く溜まった状態のことを指している（これを「II期以降」として報告されている）。今回の報告ではII期の次段階をIII期とした。II期と考えられていた複数の溝がこの時期に位置づけられ、その溝の南東部の一部が上や石で塞がって上流（北側）に細長く水が溜まった状態のことを指す。

想定される園池の変遷

I期（第30回）

柳之御所遺跡に造られた最初の池跡である。構築時期については遺物から上限を推定することはできない。下限はII期池が12世紀第4回半期頃に機能していたと考えられるので、それよりは古いといえる。12世紀中葉またはそれより古い段階と考えられる。

素堀の池であるが、自然の池ではなく人工的に造られたものである。I期池はII期池の下に埋まっている為、数ヶ所をトレンチで調査し池底と汀を確認しているが、その姿を完全に把握するまでには至っていない。上記したトレンチ調査で得られた池底と汀、これと所々で観察できるI期池堆積土とを手がかりにして規模と形状を推定したものである。

池は南北に細長い形態である。南北最大42m、東西最大23m、底面の標高は（25.1～24.8m）で北端と南端がやや高く橋脚付近が若干深い。平均24.9m位となり、遺構検出面からの深さは80～60cmである。概ね平坦な底面から岸への立ち上がりは、緩やかな勾配となるように盛土されているところが多かった。池北端部74-74グリッド付近からは現在も水がしみ出しており、当時も主に自然湧水から池の水を得ていたと考えている。

橋跡（64SX1）は南北に細長いこのI期池に東西方向に架けられていた。軸方向はN-90°-Wで、東側から見るとそのほぼ正面に無量光院や金鷄山を見ることができると判断される。南北1間×東西5間の掘立柱の橋脚と推測している。西端の1間分は削られて失われているとの判断である（橋跡を構成する柱穴の東端部は池底ではなく陸部にあつてその堀込みも池底の柱穴より浅かった。西端の1間分が削られて失われていると考えたのは、東端部のように浅い柱穴であったと仮定したためであり、必ずしも東西対称の構造とならなくてもよいのであれば南北1間×東西5間にこだわる必要はないであろう）。南北11尺、東西7尺間隔で柱の太さは柱痕跡から7～9寸あることが判明している。半截して調査した柱穴では柱材は残っていない。

排水は31SD58を使っていた。溝は池北半部の西端から西側へ直線的に延びている。当時は堀まで達していたのであろう。幅100cm、深さ最大70cmに掘り込み銅板を幅50cmで据えて暗渠排水していたようである。銅板を据える溝は柳之御所遺跡ではこの31SD58のみである。池尻とこの排水溝の取り付け部分は状態が悪い。II期盛土の土厚で潰れたようになっていた。よって構造はよく分からないが、凝った意匠を施していた感じはなかった。

I期池の問題点としては大きくは2つあげられる。第一は池の形態の問題である。第30図に示したI期池の形態は前述した調査内容から概ね確実な部分だけを結んで推定したものである。従って不確実だが可能性のある部分もある。具体的には池北半部が西側へ延びる可能性、そして南端部から西側へ延びる可能性である。北半部の西側では地山の直上に薄く自然堆積層が確認されている。これをII期埋土ではなくI期埋土と仮定した場合の話である。その底面（地山面）標高は59T2で25.2m、59T3で25.1mであった。I期の池底レベルと30cm前後高い底面である。57次調査のT7では北西に向かって底面から緩やかに立ち上がるため西側へは池が延びないと判断していた。たとえ30cmでも比高差があるからである。しかしながら、池の水位が50～60cmもあると考えるならこれほどの段差にあまり意味はなくなる。そうするとI期池の形状は、北半部では2条の溝が西に約10m延びてから1つに合流し、南に向きを変えていくとも考えられる。しかし、その先は残りが悪く不明である。同じく南端部も西-南西方向にどのくらい延びるのかは不明となる。推定図は作成していないが、概ねII期池に似た地山を掘り込んだだけの池となるかもしれない。但しそうすると排水溝（31S D58）が不自然な位置にあることになる。第30図だと池尻に取り付くが、後述した考え方だと池北半の中央に排水溝が位置することになる。技術的・作庭意匠の上で問題がないのならよいのだが、池底の下を排水溝が延びていることになり無理があるように感じたのである。

第二の問題は31S D58を排水溝とは見ないで導水溝とする考え方である。この溝は東-西方向に直線的に造られており、全長30.5m程が現在も残存している。西端部は自然消滅しているがこれは緩斜面となるため、本来は柳の御所遺跡を囲む堀跡にまで延びていて堀に排水していたと考えられる。現存する溝の東端（池尻）と西端（堀に近いほう）で比高差は29cmである。59T2で14cmと西端が低くなっているわけだが、それでもこの程度なら水を西（堀）から東（圃池）へ流せるとする考え方である。溝自体の比高差は小さいかもしれないが、溝と堀との比高差はかなり大きい。猫間が淵の上流まで堀を越えて樋を延ばすのもかなり厳しいと考え素直に排水の溝と考えたい。

ここでI期以前の状況についても整理しておきたい。I期以前とはつまりここに池がなかったときの状況である。確認されている遺構としては複数の井戸や溝がある。井戸は59T3で1基、59T1dで1基確認されている他、池に極めて近い位置にあるもの、たとえば28S E18や31S E8などもこの時期の可能性はある。溝は池東半部を南北に延びる複数の溝がこの時期にあったと思われる。それは59T1aや59T1bトレンチの断面にII期及びI期より下にある溝が前述した南北に延びる複数の溝が合流して1本になったものに相当すると考えたからである。これらの溝は池I期・II期の段階には当然機能していないと考えている。

II期（第31図）

I期の池を大規模に造り替えた池である。重複する遺構との関係などから12世紀第4四半期ごろに位置づけられる。

池は南北にやや長い中島を有する形態と推定された、南北約42m、東西約35m、底面の標高は深いところで24.8～24.9mを測る。遺構検出面からの深さは60cm前後である。I期池を埋め立てるかたちで立体的に盛り土し、その盛り土に大小の石を貼っている。石は動いている（当時配置されたであろう位置から）ものが南西部や南部には多かったが、それでも池に使われていた石の量を想定するには役立つ。濃淡はあろうがほぼ全城に石を配っていた可能性がある。北半部並びに東側では石の残りは良好といえ、特に北半部には大きな石組みもある。中島北壁の景石群と池北側壁中央の護岸石、その近くにある湧水箇所と考えた石組みなどがあり、その周りにも径50cm前後の石が多く見られる。池の北東端-東-東南端には小石が多く敷き詰められており州浜の雰囲気を今も留めている。中島は南北25m、東西12mある。土坑・井戸跡などが検出されているが、掘り下げた遺構はみな池とは関係ない時期のものだった。中島から池に係る遺構は確認されな

かった。中島に渡る橋跡も確認されなかったが、なかったとは断定できない。池の土中で橋の柱穴を探すのは難しく地山面まで下げて調査すると池が壊れるため、これ以上掘るのを控えたのである。

池南西部は残りが悪かった。それでも池底に堆積土や盛り土のシミを途切れ途切れではあるが確認することができた。底から岸への立ち上がりも若干だが残っておりこれらを基にして池の範囲を想定した。

池の水についてはⅠ期と同様に自然湧水で得ていたとみたい。導水溝と想定していた28SD1が機能していたかどうかは再調査しても判らなかつた。排水については池南端にある31SD59を想定した。

柳之御所遺跡は猫間が濶に向かって緩やかに下がる地形のため池を造るには旧地形で高いところ(北東側)を削り、低い方(猫間が濶に近い南西側)には盛り土をして平坦地を造成しなければならなかつた。よって池は周辺の建物跡よりは一段低い面に造られていたといえる。池北側は地山を深く掘り込んで池底とし、池南西側になると盛り土した上から造られ、池底付近だけが地山面まで達していたと推測される。現在確認される池と池の北東側にある建物との間にある深い開削は12世紀に造園する際に生じた段差に影響され昭和になってから大規模に整えたものによるためなのではないだろうか。池南西部の残りが悪いのも盛り土が全て流出してしまったためとするなら説明がつくのではなからうか。調査区内ではこの流出した盛り土は見つかっていない。しかし、堀には堆積している可能性があることから、今後の調査に期待したい。

池と規模の大きな建物群他は跡跡23SA1によって囲まれていたと考えられていた。23SA1自体、北側及び西側に延びるに従って削られて失われているので全容は不明なのであるが、23SA1の南辺は直線的に西に延び、池も堀の中に取まれていると考えられていた。今回の調査で不確定であった池南西部の行線も推定されたわけだが、この堀の中に取まるという考え方は再考しなければならなかつた。池底と堀推定線はほぼ重なるか、池が外に少し出るのである。庭園の一部として池を見なければならないので、池底を突然堀で塞いでしまうようなことはないであろう。堀の痕跡が残っているわけでもないし、庭園の範囲を確認することは発掘では難しく明らかにできない点として残っている。また、池と堀との同時性を再検討する必要も生じている。

この池(庭園)では儀式は行われたのか観賞するのみだったのかという問題について、中島は池に対して面積が大きいので儀式を中島で行ったのではないかと指摘もあった。しかし、儀式と直接つながるような遺構・遺物は中島のみならず池からは得られていない。遺跡全体の遺物を再確認することと、絵巻・文字資料からも類推する必要がある。

Ⅱ期池についてはほぼ全容が明らかになったことにより、「作庭記」との対照も可能になったといえる。これまでは池の内容に不確かな部分が多かつたこともあってほとんど検討が成されてこなかつた。毛越寺庭園や観自在下院の舞鶴が池、無量光院の梵字が池などは作庭記流の意匠が確認できるとされている。しかし、平泉で見つかっている20数箇所の池跡の中には作庭記流のつくりを見出せないものも多いようであり、今後は「作庭記」の意匠をこの池がどの程度反映させて造られているものなのかを細かく見ていかなければならぬ。

Ⅲ期(第32図)

Ⅱ期池が廃絶した後の状態をⅢ期として報告する。岩手埋文報告書ではⅡ期以降として扱っていた段階である。年代を決める遺物がなく時期は判然としない。12世紀段階かそれ以降かまはつきりしないが、近現代の遺物はない。

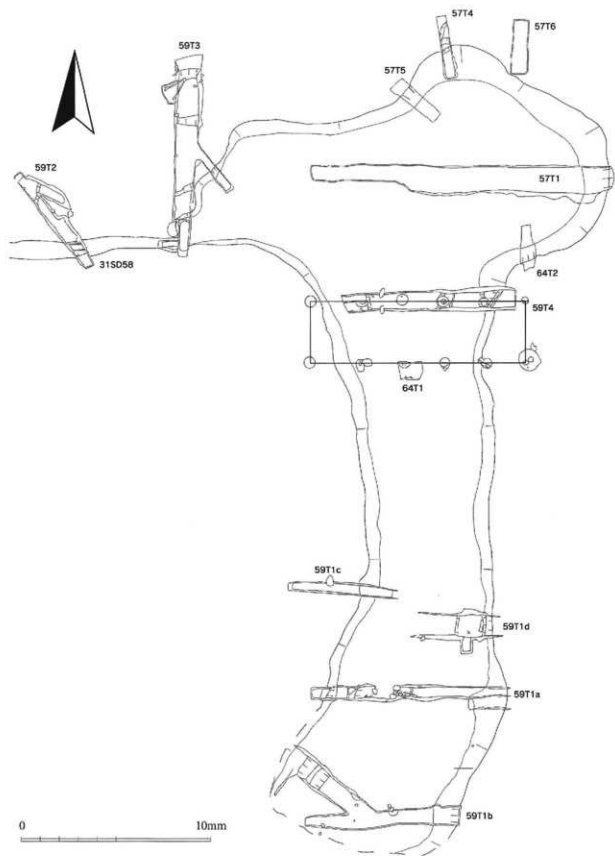
はじめにⅡ期池の東半部に複数の蛇行する溝ができていく。そのこの溝は合・分流しながら南に向かって延びていった。こうした雨裂りでできたような溝は柳之御所遺跡内ではよく見られ、規模や形状・流れる方向も似ている。もともとⅡ期池は平坦ではなく凹凸のある立体的な池であったので、その低い部分がこの段階

でいっそう深く削られてしまったといえる。同じく、Ⅱ期池の堆積土も殆どが流されてしまった。緊急調査でこの23SG1を検出したときにはⅢ期堆積土の広がりや初めに確認できたことになる。Ⅲ期の堆積土は泥と細砂とが静かに沈殿したようなラミナが主体であった。これは溝南側が塞ぎ止められていたことによる。岩手埋文報告書でも指摘されているように75-81グリッド付近で溝は大小の石と土の混合土で止められていた(第32図のアミ部分)。特にアミ部分の北端(59次T1a部分)が顕著で、人為的と考えられる。これにより59次T1aより北側では溝が塞ぎ止められて水が南北に細長く溜まっていた。溜まった水は一定の水位に達するとアミ部分の東側に沿って南-南西へ流れ下っていったようである。アミ部分を境に北と南では溝の堆積状況が異なっていることが岩手埋文報告書でも指摘されていた。

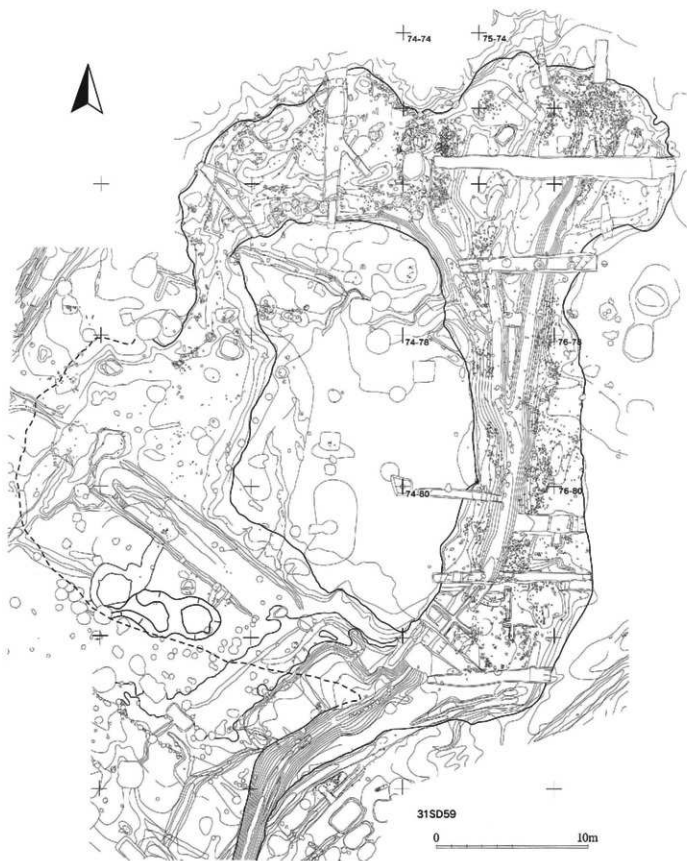
Ⅲ期は緊急調査の際にはほぼ完掘されているため、いくつかの課題があるものの再調査でそれを確かめることには限界があった。Ⅲ期の北部西側については正確な範囲を捉えることはできなかった。確実な部分だけを平面図に示している。更に西側の状況については岩手埋文報告書では埋土の状態が東と西では異なっていると指摘されていることから、Ⅲ期に含めないほうが妥当と判断した。

複数の溝そのものがⅡ期に形成されたとし、Ⅱ期池は溝の集合体のような形態であったとするのが2004年(57次調査)までの解釈で、見たこともないような池の形態と言われていた。しかしその後の調査により、溝がⅡ期の盛り土や埋土を切っていることが判ったので、溝をⅢ期に位置づけることになった。自然開析による溝と考えているわけだが、溝の中には壁に沿って石を並べているように見える部分も認められる。自然の溝に人が手を加えることはとくに問題ないと思うがこれに溝が何のために塞がれてしまったのか、その意味は何かという点も加え今回の調査でもよく分からなかった点として提示しておく。

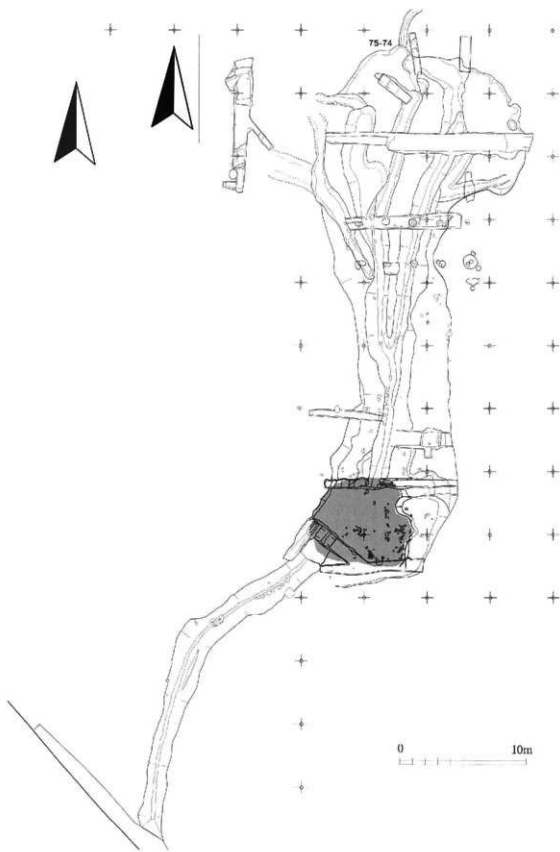
以上、23SG1の詳細な構造及び変遷のプロセスについては、部分的な調査の積み重ねということもあって、十分に解明されたとはいいがたい。今後さらに検討を継続し、柳之御所遺跡全体の中での位置づけを因っていく必要がある。



第30图 23SG1 (I期) 平面图



第31图 23SG1 (II期) 平面图



第32图 23SG1 (Ⅲ期) 平面图

付 編

1 柳之御所遺跡園池(23SG1)の水源推定

園池遺構(23SG1)は、平成元年(1989)の第23次調査で検出されて以来、精査が続けられてきたが、遺構の遺存状況が悪く、また、Ⅰ期園池については部分的な調査にとどめていることもあり、構造の細部については推測の域を出ない部分が多い。園池の給排水構造もその一つである。排水についてはp48を参照されたい。

(1) 給水についての従来案

23次及び28次調査段階から、給水についてはいくつかの可能性が示されていたものの、いずれも決定的な根拠に乏しく、また、矛盾等についても十分に説明できなかったことから、岩手埋文「報告書」においてもあいまいな記載となっている。

以下、従来案のおもなものについて示す。

ア 園池北側に取り付く溝状遺構(28SD1)を遺水とみなす考え方

「報告書」本文で示された考え方で、調査当時から有力な考え方と見られていたものである。溝の規模や勾配についても遺水とすることに矛盾はなく、「作庭記」ともおおむね整合していた。一方、給水源が確認されないことから、実際には遺水として機能しなかったのではないかと、なども考えられていた。23SG1との同時性も不明である。

イ 猫間ヶ淵(31SD58)を給水源とする考え方

Ⅰ期には排水溝(31SD58)が報告されている。暗渠構造で側板をもつものである。この溝を排水ではなくⅡ期も含めた給水とみなすものである。その根拠は、1)排水に木樋のように丁寧な施設を設けるのは不自然である 2)溝底部の東西のレベル差はきわめて小さく、猫間ヶ淵側の水位が高ければ、給水施設として十分に機能する というものである。しかし、現況の猫間ヶ淵と溝底部のレベル差が1mを超えること、また23SD1の延長にあたる内堀とどのような関係であるのか説明しきれない。

ウ 北西部高館方面から掛樋などの施設で給水したとする考え方

漸移的に標高が高くなる高館方面には、現在でも自然湧水している地点が確認されていることから、高低差を利用して導水施設を設置していたのではないかとするものである。しかし、遺構や遺物としてはまったく確認されていないことに加え、相当の距離を想定しなければならず、ある程度頻繁な人的往来があったと推定される範囲内に、常時そのような施設が設置されていたとは考えにくい。

エ 付近の井戸等から人力で給水したとする考え方

遺跡内で60基余の井戸状遺構が確認されていることから、それらから汲み上げて給水したとするもので、物理的にはありうるが、一般論として想定しにくい。

オ 自然湧水を利用したとする考え方

消去法的に自然湧水を利用したのではないかとする考え方があったが、根拠が明確でなく、あくまでひとつの可能性にとどまっていたが、平成16年度に史跡整備工事に先行して遺跡内の地質調査を実施した結果、園池の給水源として複数の根拠を示すことができることから、もっとも有力であると考えている。

(2) 遺跡内ボーリング調査から

ボーリング調査は、遺跡内4箇所で行った(第33図)。その際の水位観測の結果をもとに、遺跡内の帯水層

が3層存在していることが推定されている。

帯水層は砂質シルト、砂、砂礫層であり、上位から第一帯水層、第二帯水層、第三帯水層と命名された。第三帯水層は段丘礫層で、ボーリング結果からはほぼ水平に堆積している。地下水温度の測定結果からは北側から南側へ流れていることが推測された。第二帯水層は地表面と礫層の中間点付近に位置する砂層で、北上川寄り段丘崖および南側段丘崖に聞くレンズ状の堆積を示す。第一帯水層は地表面下数mの砂質シルト層であり、北側および西側狭間ヶ淵に層厚を増しながら微傾斜している。これら帯水層の標高は、第三帯水層が約20m以深、第二帯水層が22m～23m、第一帯水層が24m～25mと推定されている。

3つの帯水層は各帯水層上端より水位が低いことより圧力を受けない自由地下水とされた。第一、第二帯水層はボーリング地点によっては観察されず、堀内部を中心に広がる層と推測される。このことから堀内部周辺の降雨を集積し、園池に水を供給する役目を担っている帯水層であった可能性がある。第三帯水層は下限まで掘削していないため本来の層厚は不明であるが、B-3（ボーリング点）で6m以上の厚さがあり、広範囲に広がることから、地下水位観測結果とあわせても豊富な水量が得られると推測される。

現在の状況と、12世紀当時がまったく同様であったとはいえないが、遺跡内の基本層序に影響を与えるほど大規模な地質条件の変化があったとは考えにくいので、これらの層が当時も帯水層として機能したと考えよう。

(3) 井戸状遺構及び園池給水源との関係

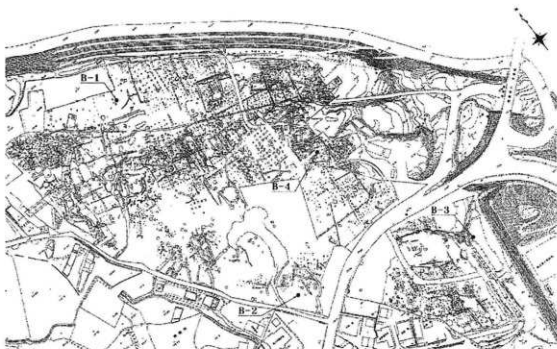
次に、ボーリング調査から推定された帯水層と12世紀井戸状遺構との関係についてみる（第34、35図）。井戸の掘削深から、当時の井戸が、第1～第3いずれかの帯水層を利用して構築されていることが推定される。現在の地下水環境では、第1帯水層を利用した井戸は十分な湧水がなかった可能性が指摘されているが、深度の浅い井戸状遺構も少なくないことから、使用できる程度の井戸であったことは確実であろう。

それぞれの井戸の水位を個別に推定するのは困難であるが、遺構埋土の観察では、下位にグライ化した土壌が認められる場合がほとんどである。この層と当時の井戸水位が、何らか関係している可能性はある。

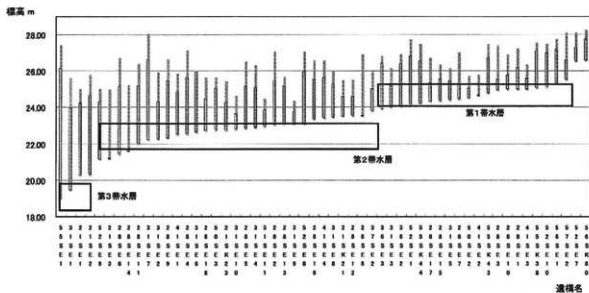
園池（23SG1）の付近には、28SE12、13、14、15、18、31SE1、2、3、4、5、8などの井戸状遺構が確認されている。このうち、28SE15、31SE5は第1帯水層を利用した井戸で、埋土から推定される水位は25.5～25.6m前後である。これは、園池の湧水として第1帯水層を利用したと考えることが可能な数値である。

p26で説明した園池内の石組みは、「報告書」では崩落した景石の一部として報告されていたものである。しかし、崩落の状態とは明らかに異なって、人工的に組上げた状態として捉えるべきものである。石組み内底面の標高24.861m。調査では、この地点での湧水は認められなかったものの、石組み北東4.5mの壁面ではほぼ同レベルで地下水の浸出が観察された。以上より、この石組みを、23SG1の給水に関わる構築物として考えておきたい。

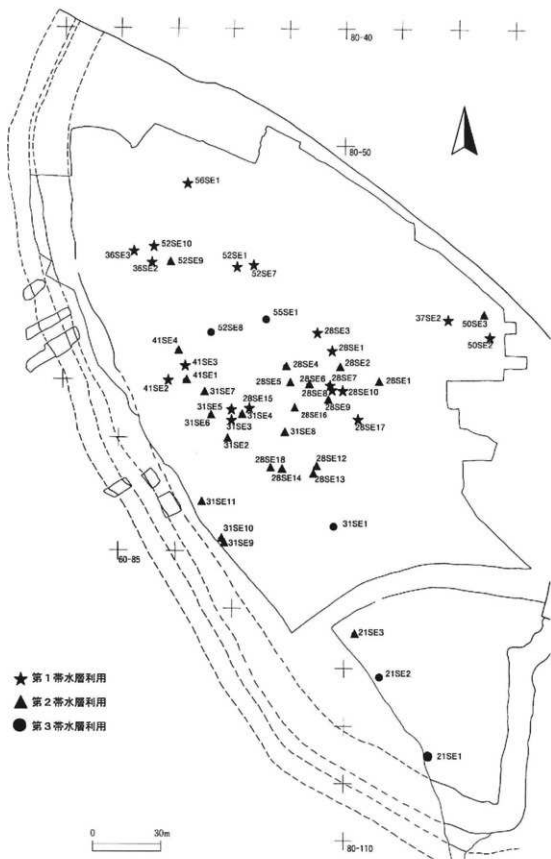
これらより、第一帯水層を園池の給水源の可能性を想定できるが、前述のとおりこの層は雨を集積するという機能を担いながらも、ボーリング調査結果から推測される湧水量はそれほど多量のものではない。降雨後を除けばじわじわと滲む程度であろう。したがって、自然湧水を給水源とした場合においては、園池内の水は復元された毛越寺大泉ヶ池から連想されるような、相当量の水が常時供給される透明度の高い池ではなく、通常はほとんど流れのない、保水量が増加した雨上がりの時などに石組みから水が湧き出すような園池であったと推測される。以上より、当初の給水方法については、この園池が周辺より低い場所にあり、ある程度の降雨があれば少量でも水が溜まる程度の規模であることから、自然湧水と雨水という、自然現象を最大限に活用した方法ではなかったかと想定した。



第33図 道橋内ボーリング調査位置 (B-1~B-4)
平成16年度実施 水位は16.11~17.3で観測



第34図 井戸状遺構とグライ化した埋土の絶対高分布
細線：遺構の確認面から底面 太線：埋土のグライ化部分



第35図 堀内部地区井戸状遺構の分布と利用帯水層

2 柳の御所遺跡における植物珪酸体分析

株式会社古環境研究所

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

(2) 試料

分析試料は、23SG1のT1(21層)およびT3(2層)から採取された計2点である。

(3) 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10⁻⁵g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、ネザサ節は0.48、チマキザサ節型 (チマキザサ節・チシマザサ節) は0.75、ミヤコザサ節は0.30である (杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

(4) 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族A (チガヤ属など)

[イネ科-タケ亜科]

ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、チマキザサ節型 (ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など)、ミ

ヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科-その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、基部起源、未分類等

（5）考察

1）イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネが検出された。

イネは、T1（21層）およびT3（2層）の両試料から検出された。このうち、T1（21層）では密度が4,100個/g、T3（2層）でも2,000個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。これらのことから、当時は周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

2）植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、T1（21層）ではミヤコザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型、チマキザサ節型なども検出された。また、海綿動物に由来する海綿骨針（宇津川ほか、1979）も比較的多く検出された。T3（2層）でも、おおむね同様の分類群が検出されたが、いずれも比較的低い値である。

以上のことから、当時の調査区周辺は、ネザサ節やミヤコザサ節などの竹笹類およびウシクサ族などが生育する日当たりの良い比較的开かれた環境であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また、海綿骨針が比較的多く検出されることから、海綿（スポンジ）が何らかの形で利用されていた可能性も考えられる。

（6）まとめ

植物珪酸体分析の結果、T1（21層）およびT3（2層）からはイネが検出された。このことから、当時は周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。

当時の調査区周辺は、ネザサ節やミヤコザサ節などの竹笹類およびウシクサ族などが生育する日当たりの良い比較的开かれた環境であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また、海綿骨針が比較的多く検出されることから、海綿（スポンジ）が何らかの形で利用されていた可能性も考えられる。

文 献

- 宇津川徹・細野衛・杉原重夫 (1979) テフラ中の動物珪酸体 "Opal Sponge Spicules" について。ペドロジスト, 23 (2), p.134-144.
- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール)。考古学と植物学, 同成社, p.189-213.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 -。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 -。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表1 柳之御所遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: $\times 100$ 個/g)

分類群 (和名・学名) \ 試料		23SG 1	
		T 1.21層	T 3.2層
イネ科	Gramineae (Grasses)		
イネ	<i>Oryza sativa</i>	41	20
キビ族型	<i>Panicaceae</i> type		5
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		7
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	14	
ウシクサ族A	<i>Andropogoneae</i> A type	14	5
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)		
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	7	15
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	21	15
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	83	41
未分類等	Others	55	10
その他のイネ科	Others		
表皮毛起源	Husk hair origin	69	10
棒状珪酸体	Road-shaped	83	31
茎部起源	Stem origin		7
未分類等	Others	228	153
(海綿骨針)	Sponge	83	51
植物珪酸体総数	Total	629	305

おもな分類群の推定生産量 (単位: $\text{kg}/\text{m}^2\cdot\text{cm}$) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.20	0.60
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.44	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.17	
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.03	0.07
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.16	0.11
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.25	0.12

タケ亜科の比率 (%)

ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	8	24
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	36	37
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	57	39

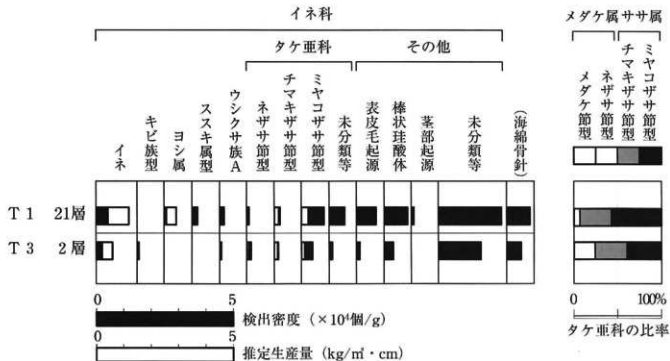


図 1 柳之御所跡23SG 1 における植物珪酸体分析結果

3 柳之御所遺跡12世紀出土木製品の樹種同定

上田 弥生 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

ここでは、柳之御所遺跡から出土した12世紀に中定される木製品1点の樹種同定結果を報告する。

2. 樹種同定の方法

木製品の一部破片から、材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート（材組織標本）を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。

材組織標本は、岩手県立博物館に保管されている。

3. 結果

材組織標本を観察した結果、以下に記す形質が確認され、木製品の材質はクリと同定された（図版1）。

クリ *Castanea-crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版1 1a-1c

年輪の始めに大型の管孔が密に配列し、除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースが発達している。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材質も粘りがあり耐朽性にすぐれた有用材であり、有用な樹木である。



図版1 柳之御所遺跡出土木製品材組織の光学顕微鏡写真

1a-1c：クリ a：横断面 b：接線断面 c：放射断面 bar：a=1.0mm, b=0.4mm, c=0.2mm.

4-1 柳之御所遺跡出土壁材調査

株式会社 文化財保存計画協会

1 調査の概要

柳之御所遺跡の発掘調査でこれまで多量に出土している壁材断片とみられる土製遺物について、全体像を把握するとともに、その特徴を明らかにするための調査を実施した。

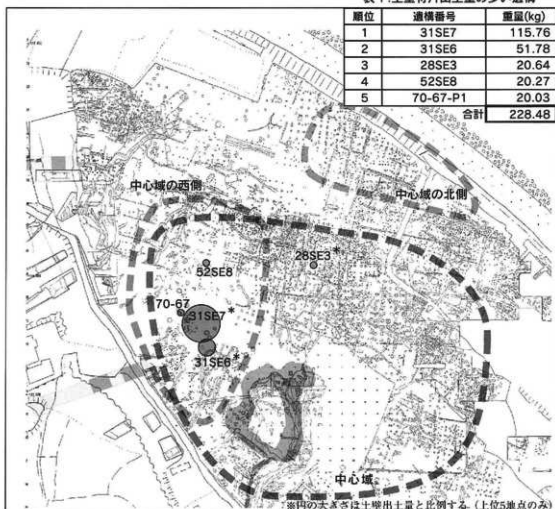
この調査は、建物の上部構造を復元する手掛かりとなるような情報をできるだけ増やすことを意図しており、そのため遺物の分析を通じて、以下のような諸点を明らかにすることを当面の目標とした。

- ・小舞下地や仕上げを含む土壁の仕様・構法（分類の可能性）
- ・それを用いた建築物の格（質素か豪華か）、仕事の程度（手間の掛け具合）
- ・出土地点や所属年代の検討から、特定建物との対応関係がわからないか……など

調査・検討作業は、まず現在までに発掘された土壁遺物の全量を対象にリストを作成しつつ、その中から状態の良い遺物を適宜抽出して特徴の把握および分類を行った。具体的方法としては、おもに目視と計測に拠ったが、少数のサンプルについては科学的分析手法による成分分析を実施した。

表1.土壁材片出土量の多い遺構

順位	遺構番号	重量(kg)
1	31SE7	115.76
2	31SE6	51.78
3	28SE3	20.64
4	52SE8	20.27
5	70-67-P1	20.03
合計		228.48



柳之御所遺跡遺構平面図

2 出土数量について

出土した土壁材のほとんどは細かく破断した断片で、磨耗して角がとれ、丸くなっているものや、単なる土塊に近い形状のものも少なくない。おそらくは、さらに多くの壁材片が既に土に崩してしまっていると思われる。また、発掘調査の時点でも、全量が遺物として採集された訳ではなく、取り上げられないまま埋め戻し土中に混入している分も多いとのことである。

これまでに確認されている土壁遺物のうちでは、現在柳之御所資料館に展示されている1点が最大寸法である。試みに、この遺物の表面積0.043㎡と重量2.17kgをもとに計算してみると、既存の出土土壁遺物の総重量416kgに対する壁面積は、

$$416 \times (0.043 \div 2.17) = 824 \text{ (m}^2\text{)}$$

という結果になる。実際には、壁材片の比重は資料ごとによりかなりの差があり、この遺物の数値が平均的なものである保証はないが、一応の目安として掲げておく。ちなみに、1間×半間、すなわち畳一畳分の面積は1.82×0.91=1.66 (㎡) であるから、上記の面積は5畳弱分にしか満たない。壁材片の出土地点や種類についてはそれなりのばらつきがあることからみても、付近の建物にかつて用いられていた土壁の総量は確認出土量をはるかに上回るものであった可能性が高い。

3 出土地点について

出土状況としては、建物跡の遺構等にもなって出土したものは少なく、土壁もしくは井戸状遺構の埋土中から出土したものが量的には圧倒的である。

壁材片を出土した遺構を、出土量の多い順にまとめたのが表1である。これを見てわかるように、第5位までの地点で総量の52%を出土しており、これらはいずれも井戸状遺構と呼ばれる投棄孔である。つまり、廃絶した建物跡を片付けた際に、そこに用いられていた土壁の断片が廃材として投棄され、偶然残ったことが考えられる。火災で焼かれたと見られる壁材片が少なからず認められることも、このような状況に符合するものであろう。

一方、建物跡の遺構における壁材片の出土例は少数にとどまり、かつ基本的に埋土中からの検出であるため原使用位置との関連も希薄と思われる。また、壁材片に同伴する他遺物から特定の建物との関連をうかがわせるようなケースも特に見当たらないため、個々の壁材片が本来どの建物に属していたかを推察することは事実上不可能である。

4 白土仕上げの壁材片について

壁材片のうちで注目されるのは、白色の仕上げ層を伴う遺物の存在である。この白色仕上げ層の材料については、少数のサンプルが対象ではあるが、別項で述べる成分分析の結果、漆喰ではなく白土であることが判明した。

出土量から見れば、白土を伴う遺物の重量は総量の15.7%にとどまっている。また、その出土地点もまなべんなくではなく、特定の地点に集中して出土している。具体的には、31SE7、31SE6といった遺構からの出土点数が多い。これらの遺構は当遺跡の最終期またはそれに近い時期に属すると考えられているが、28SE2のようにもっと古い時期の遺構からも白土付壁材片の出土例があることから、どの時期についても白土仕上げの上壁を用いた建物は存在し、かつ建物群全体の中では一部の重要な建物に限って用いられた仕様であった可能性が高い。

5 土壁材の詳細検討

壁材片遺物のうち、外観上に特徴のあるものとしては、表面が炭化しており火中したとみられるもの、裏面に小舞の当たり痕跡を伴うもの、表面に白土の仕上げ層を伴うもの、などがあげられる。

土壁の構成 壁材はいずれも片面のみを仕上げているが、背面側が平らな面に押し付けられたような形状を呈する例があり、反対側が板壁である状況などが考えられる。表面の平滑度は全般に低いが、平滑に仕上げた表層部分が既に失われている可能性もある。ほとんどの遺物は荒土のみか、これに直接白土を仕上げ層として塗ってある。土壁の仕上げ層については、白土などが既に剥落してしまっている例が含まれている可能性も高いが、荒打ちをした上から同じ荒土で珪直しを加えたと見られる例も少数ながら認められ、白土を伴わない荒壁仕上げもあったと考えてよさそうである。荒土には20mm程度に切った藁ササを混入するものが多い。

土壁の塗厚 壁の塗厚には相当のばらつきがあるが、ほとんどのものは片面で30～60mm程度の範囲に納まり、3分の1が50mm以上であった。計測した中では、塗厚の最大値として80mm内外の例があった。表層の白土はごく薄く、1～2mm程度にとどまるものが大半である。

小舞の種類と寸法 小片が多い土壁材遺物の全体数量からすれば一部ではあるが、片面に小舞の当りとみられる圧痕を伴う遺物があり、その観察によって小舞の形状、間隔等が判明する。小舞に用いた材料そのものが遺存する例は、残念ながら確認できない。

痕跡から推定される小舞の断面形状としては、大きく分けて円形と角形の二種類が確認された。円形断面のものは径15mm程度が多く、この太さから判断して、材質は革などではなく、篠竹もしくはソダの可能性が高い。痕跡としては半円状を呈するものも多いが、幅12～15mmを中心に寸法的なばらつきが目立ち、円形材の痕跡が割れて半円あるいはこれ以下の部分だけ残ったとも考えられる。これらに比べると、角ばった形状の痕跡は比率としては少ないが、幅18～24mmと太いのが特徴である。

円形断面と角断面という小舞痕跡形状の違いが、遺物の出土地点やその属する年代によって何らかの傾向を示すかを分析するため、遺構別に両種の小舞痕の確認点数を集計した(磨耗や破損等で小舞痕跡が判別できない材が多いため、合計しても出土量のうちのごく一部である)。その結果、数の上では円形断面(竹もしくは粗朶)が圧倒的に多く、角断面の材は1ヶ所につき数点しか含まれないことがわかった。また、この傾向には出土地点による差異はほとんど認められなかった。

一つの壁材片に円形と角形の痕跡が混在する場合もあることから、両者は壁を造る手法自体の違いではなく、同一壁面内に両者が併用されていた可能性が高いように思える。また、角断面の場合、痕跡は20～30mm程度の幅の場合もあるが、片側の角だけが土に痕跡として残り本来の材幅は相当に大きかったと思わせる例も散見される。さらに、円形材の痕跡が比較的滑らかな表面を持つのに対して、角形材の当り痕は長手方向に線条が見られ、中にはかなり深い凹凸を残すものもある。

このようなことから、角形の材は割板状の木材を含むものと思われ、その用途としては下地の補強としての間渡し、もしくは木摺りの材が想起される。

小舞の間隔 大半の遺物は小さな断片であるため、小舞の間隔が判明するものは少ない。計測が可能なものについてみると、溝中心間の距離で33mm、36mm、45mm、60mm前後とばらつきがあり、この中では45mm内外が一番多かった。縦横に直交する小舞痕の残る例が少数あるが、縦横いずれが外側か、などの詳細は不明である。

4-2 柳之御所遺跡井戸跡出土壁材の成分分析結果

1 調査の概要

柳之御所遺跡で出土した燼材遺物には白色の仕上げ層を伴うものが相当数含まれており、そのことがまた、これら遺物を建物の壁の一部と判断する上での有力な根拠にもなっている。この白色層および壁土を対象に、遺物サンプルの成分分析調査を行った。

2 分析対象遺物（土壁）

分析対象として、園池跡の北西に位置する井戸状遺構31SE7から出土した遺物5点を用いた。

この遺構からは多量のかわけや焼け土壁片（5層31.200g、6層43.100g、7層から5.600g）、白壁破片、炭化した材、獣骨片、白磁片、漆塗り木片、格子片、箸等が出土しており、焼けた遺物が比較的多くあるのが特徴である。埋土の性質や出土遺物から12世紀後半代に埋められたと推測される。

壁材遺物を出土した下層（4～7層）は井戸状遺構特有の水分を多く含んだ滑らかな粘土、シルト層である。今回は、比較的仕上げ層の残りが良かった6層出土の遺物から5サンプル（No.84、No.210、No.219、No.243、No.271）を抽出し、成分分析の対象とした。

3 分析方法

物質を構成している化合物などを同定する手段としてX線回折（XD）を、物質表面の詳細な形態観察に走査電子顕微鏡（SEM）を、試料構成元素の分析にはエネルギー分散型X線分光（EDAX）を用いた。

4 分析結果

4.1 白色層

1) X線回折（XD）

各サンプルの白色層を粉末処理しX線回折による分析を行った。図4.1-1にNo.210サンプルのX線回折図を示す。

分析の結果、5サンプルともに石英（SiO₂）、長石類が含まれていることを確認した。また、5サンプルの成分に大きな差異は認められなかった。一方、方解石（CaCO₃）や石膏（CaSO₄）の含有は確認されなかった。

【分析装置】 株式会社、粉末X線回折装置 RINT2100V

2) 走査電子顕微鏡（SEM）

写真4.1-2に白色層サンプルの走査電子顕微鏡（SEM）による撮影画像を示す。

【分析装置】 フィリップ社製、走査型電子顕微鏡 XL20

3) エネルギー分散型X線分光（EDAX）

走査電子顕微鏡（SEM）により撮影したポイントにおいて、エネルギー分散型X線分光（EDAX）による分析を行った。分析結果として、表4.1-1にサンプルの組成比を、図4.1-6～図4.1-10にサンプルのスペクトル図を示す。

分析の結果、No.271以外の4試料は基本的に同一組成で、Al（アルミニウム）、Si（シリカ）を多く含む材料であることを確認した。No.271については、材料任意のピンポイント箇所での分析であるため、偶然にAg（銀）の部分分析したものと推察される。

【分析装置】 フィリップ社製、走査型電子顕微鏡 XL20、EDAX検出器

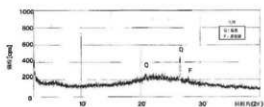


図4.1-1 X線回折図 (No.84 白色層)

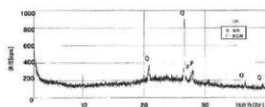


図4.1-2 X線回折図 (No.210 白色層)

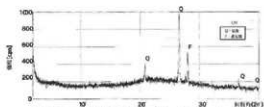


図4.1-3 X線回折図 (No.219 白色層)

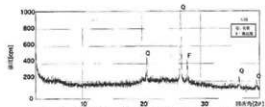


図4.1-4 X線回折図 (No.243 白色層)

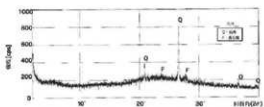


図4.1-5 X線回折図 (No.271 白色層)

	No.84		No.210		No.219		No.243		No.271	
	wt%	At%	wt%	At%	wt%	At%	wt%	At%	wt%	At%
MgO	-	-	-	-	-	-	-	-	2.25	6.07
Al ₂ O ₃	18.27	12.39	36.33	25.50	39.01	28.28	37.17	26.59	3.87	4.13
SiO ₂	49.55	57.04	58.45	69.57	49.55	60.96	50.96	61.86	7.83	14.16
SO ₂	16.81	14.52	-	-	-	-	-	-	-	-
K ₂ O	3.59	2.64	1.00	0.76	3.45	2.71	2.08	1.61	-	-
CaO	7.65	9.43	-	-	-	-	-	-	-	-
TiO ₂	-	-	-	-	1.66	1.54	-	-	-	-
FeO	4.13	3.98	4.20	4.18	6.33	6.52	9.79	9.94	-	-
Cl ₂ O	-	-	-	-	-	-	-	-	0.49	0.61
AgO	-	-	-	-	-	-	-	-	85.55	75.03
Total	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

※wt%:重量比 At%:元素数の数の比

表4.1-1 サンプルの組成比 (白色層)

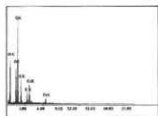


図4.1-6 スペクトル図 (サンプルNo.84)

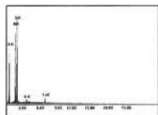


図4.1-7 スペクトル図 (サンプルNo.210)

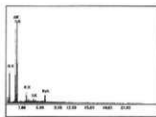


図4.1-8 スペクトル図 (サンプルNo.219)

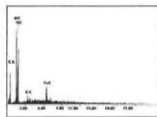


図4.1-9 スペクトル図 (サンプルNo.243)

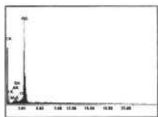


図4.1-10 スペクトル図 (サンプルNo.271)

4.2 壁土

1) X線回折 (XD)

各サンプルの壁土を粉末処理しX線回折による分析を行った。図4.2-1にNo.84サンプルのX線回折図を示す。

分析の結果、5試料ともに石英 (SiO_2)、長石類が含まれていることを確認した。また、5試料の成分に大きな差異は認められなかった。

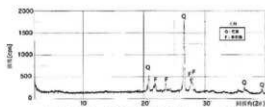


図4.2-1 X線回折図 (No.84 壁土)

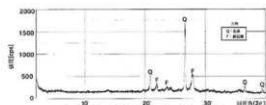


図4.2-2 X線回折図 (No.210 壁土)

図版・表

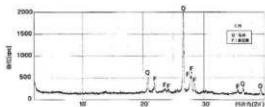


図4.2-3 X線回折図 (No.219 壁土)

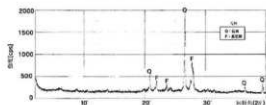


図4.2-4 X線回折図 (No.243 壁土)

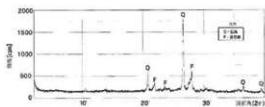


図4.2-5 X線回折図 (No.271 壁土)

5 まとめ

1) 白色層の成分について

- ・上塗された白色層では、X線回折により石英および長石類が検出され、エネルギー分散型X線分光によりアルミニウム及びシリカを主体的に検出された。
- ・古来の日本壁左官材で、上塗層としては白漆喰や白土等が想定される。漆喰では炭酸カルシウム (CaCO_3) が、白土ではケイ酸アルミニウム (Al_2O_3 (SiO_2) $6\cdot\text{H}_2\text{O}$) 等がそれぞれの組成成分となる。
- ・分析で検出された組成成分を、漆喰材料及び白土の組成成分と比較した場合、今回調査した土壁白色層は白土であると推察される。
- ・また、エネルギー分散型X線分光による分析ではNo.271の結果に他との差異が見られたが、同分析方法はピンポイント箇所の分析であり、またX線回折の結果に大きな差異が認められなかったことから、今回調査した5点の試料は同一材料であると推察される。

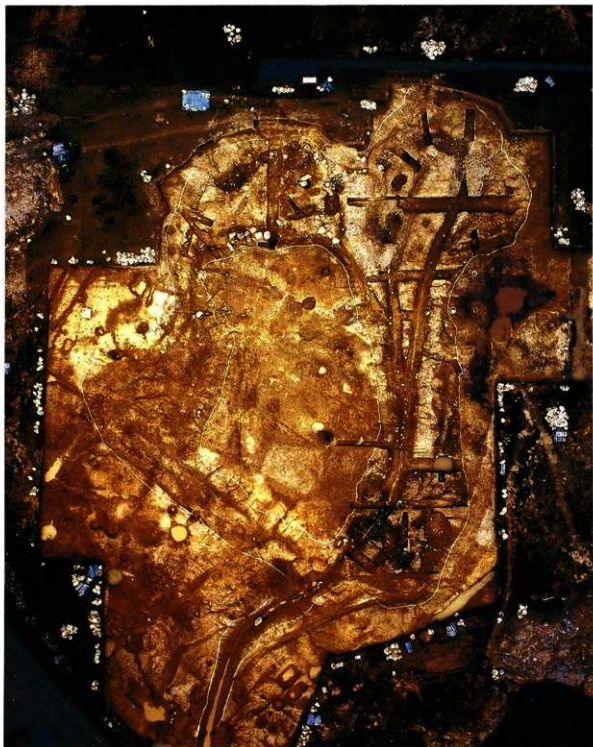
2) 壁土の成分について

- ・壁土では、X線回折により石英および長石類が検出された。
- ・また、今回調査した5点の試料は、X線回折の結果に大きな成分の差異は認められず、同じ壁土であると推察される。

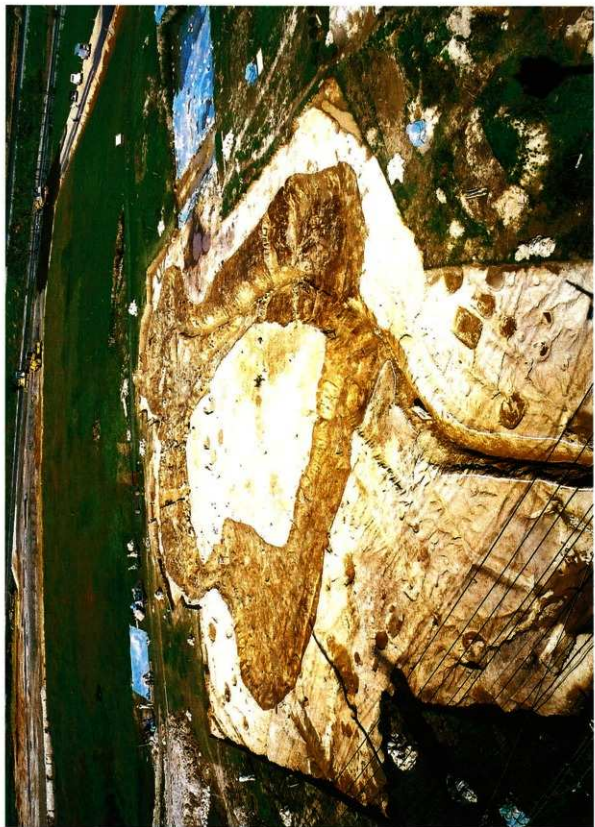
(参考) 火災の痕跡について

- ・調査した土壁サンプルは、形状が保たれていたことや、本来の粘土色とは色調が異なることなどから、何らかの燃焼作用を受けている可能性が高い。しかし、今回の成分分析結果ではこれを科学的に証明することはできない。そのためには、荒壁に含まれる炭化物の分析等、他の調査が必要である。

写 真 图 版



23SG1全景(1)上空
写真図版1 23SG1



23SG1全景(2)南から
写真図版2 23SG1



23SG1全景(3)北から



23SG1全景(4)東から
写真図版3 23SG1



小舞痕(丸形)



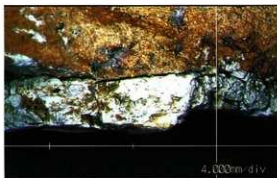
小舞痕(角形)



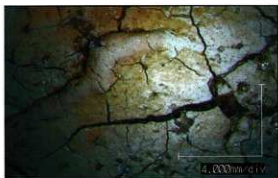
サンプルNo.210表面



サンプルNo.210裏面

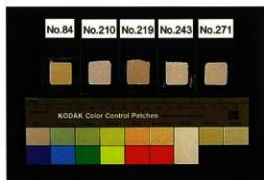


サンプルNo.210 (白色層表面) ×25倍



サンプルNo.210 (白色層断面) ×25倍

写真4.1-1 白色層サンプル写真



X線回折 粉末試料 (白色層)

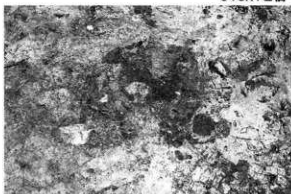


X線回折 粉末試料 (壁土)

X線回折 サンプル写真
写真図版 4



64SX1と橋 完掘（東から）



64SX1P5 検出



64T1 断面（南から）



64SX1P7 検出



64SX1P7 完掘

写真図版5 64SX1 (1)



64SX1P8 検出 (西から)



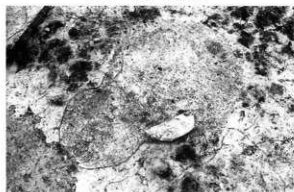
64SX1P8 断面 (南から)



64T1 検出 (西から)



64T1 検出 (南から)



64SX1P10 検出



64SX1P9 断面 (南から)

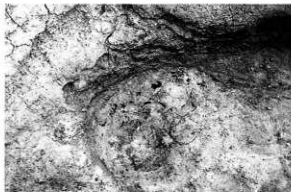


64SX1P1

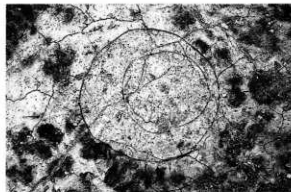


64SX1P3

写真図版6 64SX1 (2)



64SX1P4



64SX1P5 検出



64T2 断面 (東から)



64T4 検出 (東から)



池内の湧水? 断面 (南から)

写真図版7 64SX1 (3)・T2



64T4 検出 (南から)



石組1



石組2



23SG1 湧水点① (南から)



23SG1 湧水点② (南から)

写真図版8 64T2・石組1・2・湧水地点



石組3



23SG1 II期 玉石



23SG1 II期 玉石



23SG1 II期 玉石



修羅 出土状況

写真図版9 石組3・石敷検出・修羅出土状況



修羅 出土状況



修羅 出土状況



修羅 出土状況



64SK1 レキ検出(南から)



64SK1 断面(南から)



64SK2 断面(南から)

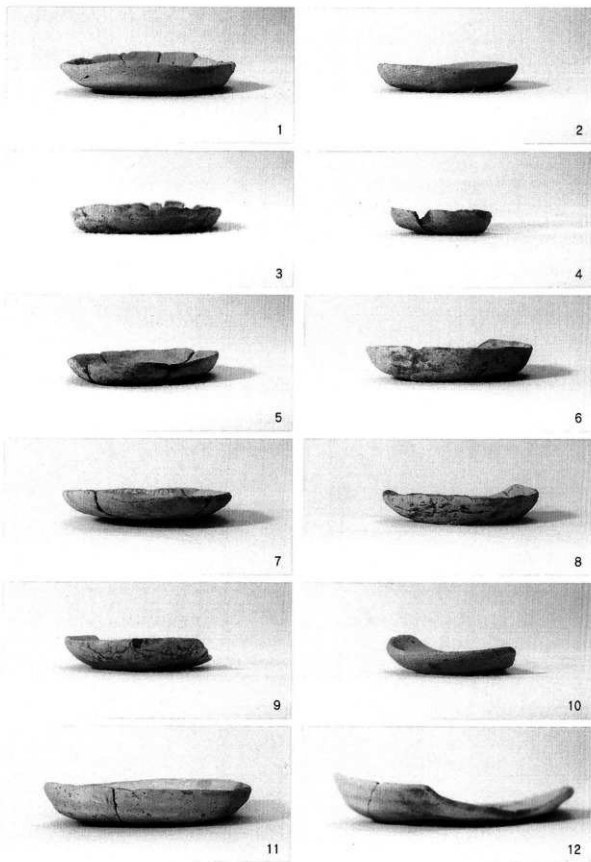


作業風景



現地説明会

写真図版10 修羅出土状況・64SK1・2



No.1~12 : 23SG1T1d

写真図版11 かわらけ (1)



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24

No.13~24 : 23SG1T1d

写真図版12 かわらけ(2)



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36

No.25~36 : 23SG1T1d

写真図版13 かわらけ (3)



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



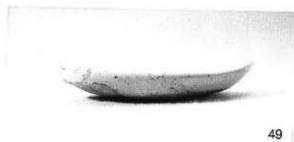
47



48

No.37~40 : 23SG1T1d
No.41~48 : 23SG1T2

写真図版14 かわらけ(4)



49



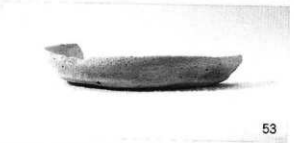
50



51



52



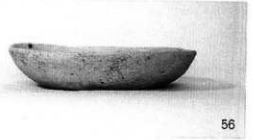
53



54



55



56



57



58



59



60

No.49~56 : 23SG1T2
No.57~60 : 23SG1T3

写真図版15 かわらけ (5)



61



62



63



64



65



66



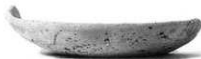
67



68



69



70



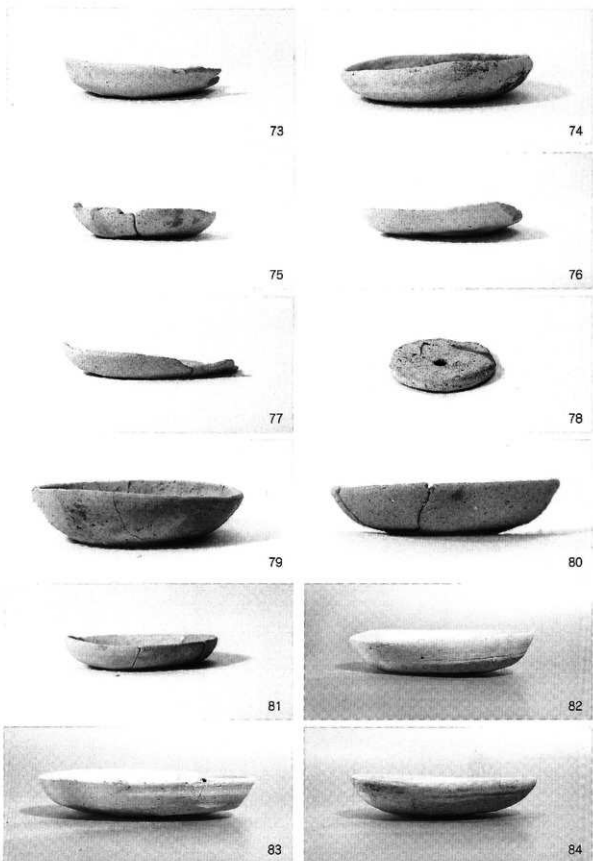
71



72

No.61~72 : 23SG1T3

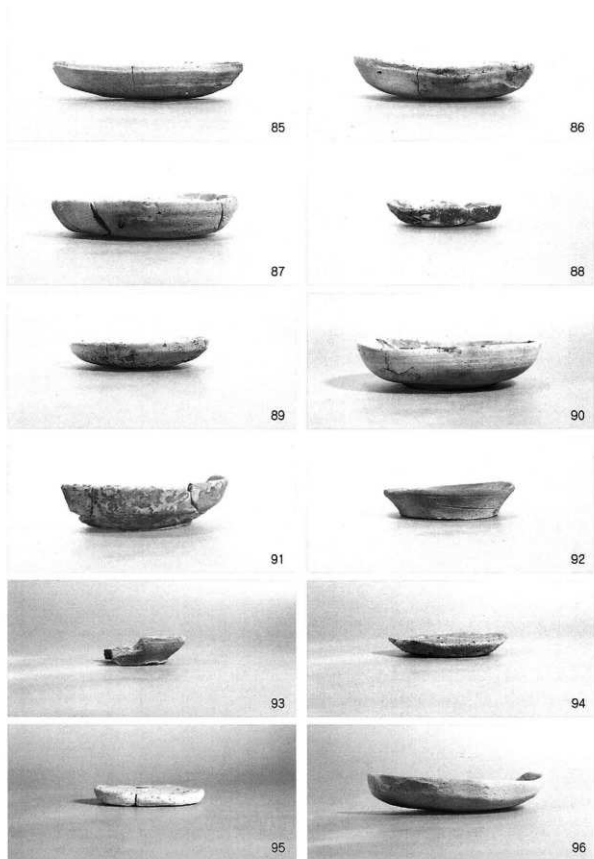
写真図版16 かわらけ(6)



No.73~74 : 23SG1T3
 No.75~78 : 23SG1T4
 No.79~81 : 59SK5

No.82 : 23SG1T1
 No.83~84 : 23SG1T7

写真図版17 かわらけ(7)

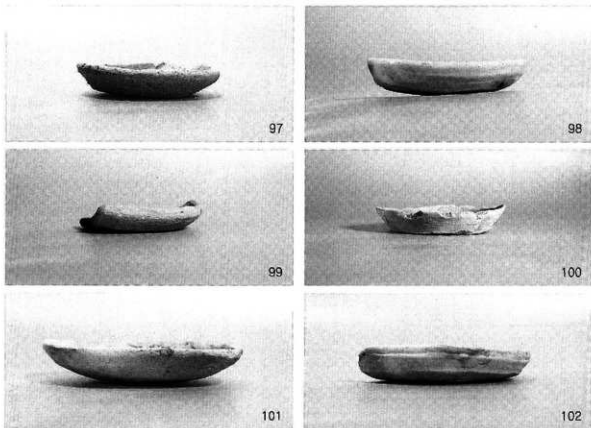


No.85~92 : 23SG1T3

No.93~95 : 23SG1T1

No.96 : P9

写真図版18 かわらけ(8)



2002



3002



3003



1003

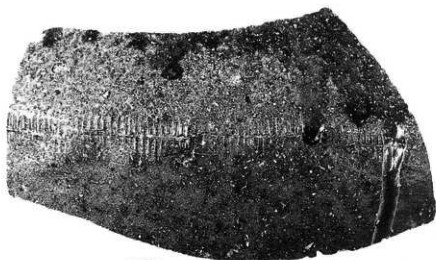
No.97 : II期池検出面
 No.98~100 : YG64SK1
 No.101 : 59SE1上面

No.102 : 出土地点不明

写真図版19 かわらけ(9)ほか



1001



1002



1004



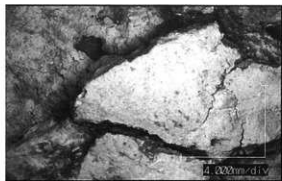
3001



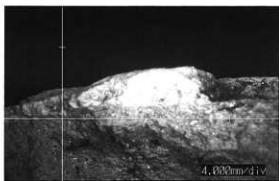
写真図版20 国産陶器・瓦



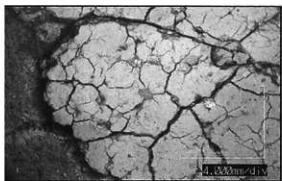
写真図版21 木製品（修羅）



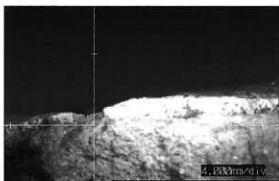
サンプルNo. 84 (白色層表面 ×25倍)



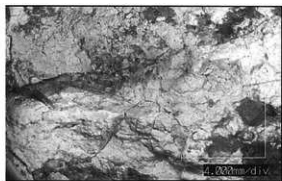
サンプルNo. 84 (白色層断面 ×25倍)



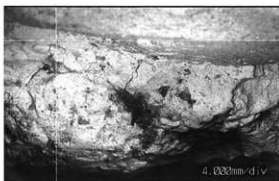
サンプルNo. 219 (白色層表面 ×25倍)



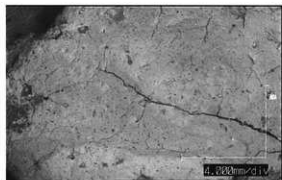
サンプルNo. 219 (白色層断面 ×25倍)



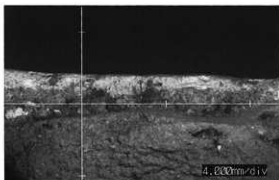
サンプルNo. 243 (白色層表面 ×25倍)



サンプルNo. 243 (白色層断面 ×25倍)

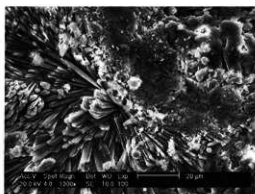


サンプルNo. 271 (白色層表面 ×25倍)

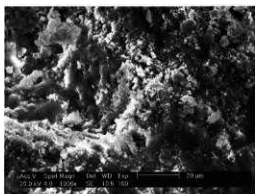


サンプルNo. 271 (白色層断面 ×25倍)

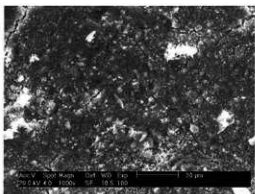
写真図版22 出土土壁サンプル



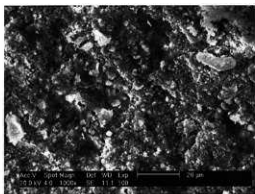
サンプルNo. 84



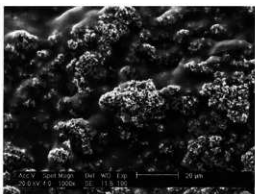
サンプルNo. 210



サンプルNo. 219

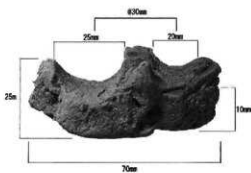


サンプルNo. 273



サンプルNo. 271

写真4.1-2 白色層サンプルの走査電子顕微鏡 (SEM) による撮影画像



写真図版23 出土土壁サンプル

報告書抄録

ふりがな	ひらいずみいせきぐん やなぎのごしよいせき							
書名	平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡							
副書名	第64次発掘調査概報							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第123集							
編著者名	杉沢昭太郎 大関真人 吉田光 佐藤嘉広							
編集機関	岩手県教育委員会							
所在地	岩手県盛岡市内丸10-1							
発行年月日	2007年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ひらいずみいせき 柳之御所遺跡	いわてけんしほ 岩手県西磐 いんざわあちほ 井郡平泉町 ひらいずみごし 平泉柳御所 地内	03402		38度 59分 28秒	141度 7分 35秒	第64次 2005.04.15 ～ 2005.09.30	2,500	史跡整備に 向けた内容 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
柳之御所遺跡	奥州藤原 氏に関連 する居館 跡	12世紀 近世以降 時期不詳	井戸状遺構 園池 土坑 橋跡	2基 1基 2基 1基	かわらけ 国産陶器 中国産陶磁器 瓦 木製品			

岩手県文化財調査報告書 第123集
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

— 第64次発掘調査概報 —

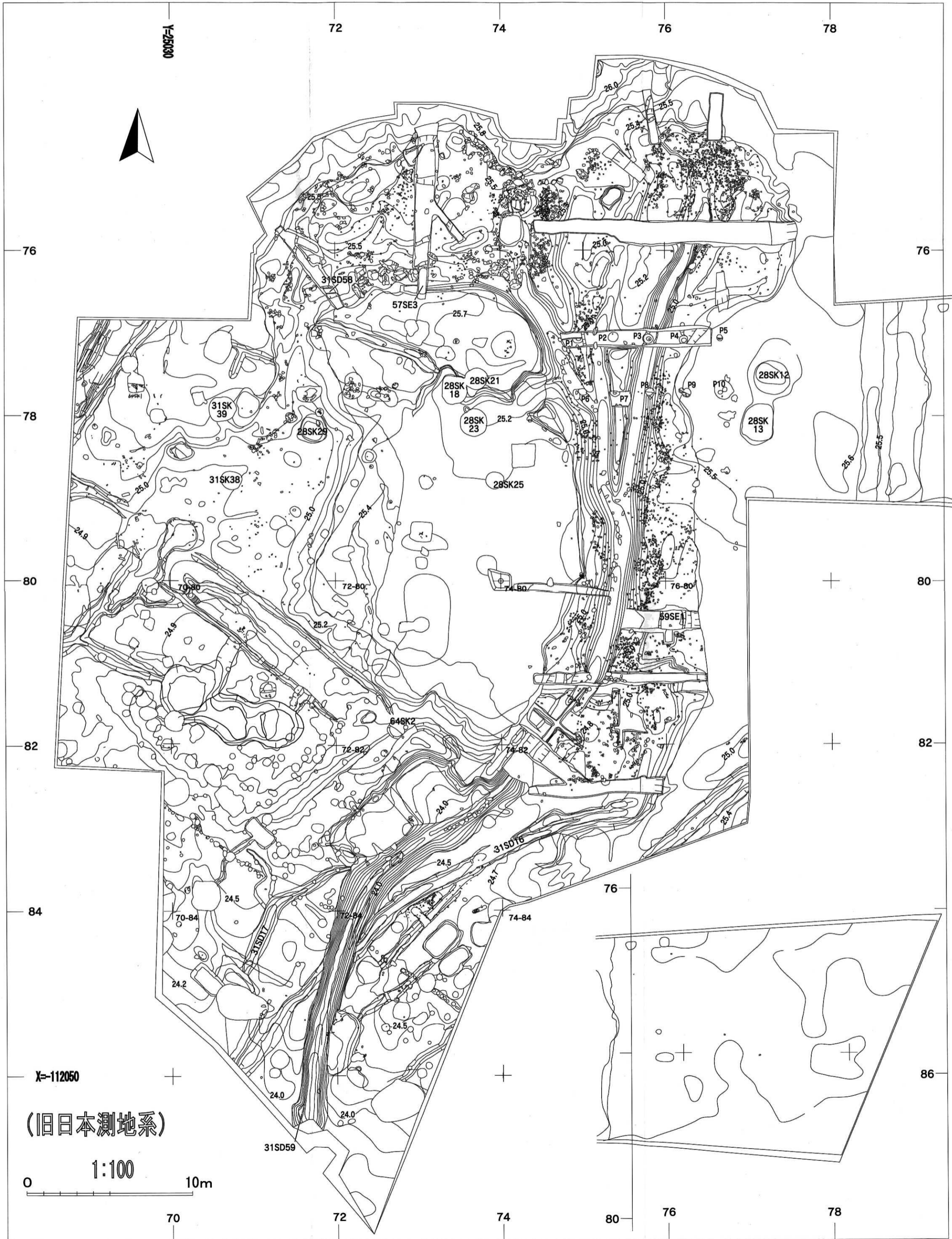
平成19年3月31日発行

発行 岩手県教育委員会
岩手県盛岡市内丸10-1

編集 岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課

印刷 河北印刷株式会社
岩手県盛岡市本町通2-8-7

柳之御所遺跡第64次調査遺構配置



X=112050

(旧日本測地系)

1:100

0 10m

70

72

74

80

76

78

86